

# 壬生藩医五十嵐家に伝わるもう一つの解剖図 『(異種) 解体正図』の考察

稲葉未知世<sup>1)</sup>, 田所 望<sup>2,4)</sup>, 西山 緑<sup>3)</sup>, 中野 正人<sup>1,5)</sup>

<sup>1)</sup> 獨協医科大学教育支援センター医史学研究室, <sup>2)</sup> 獨協医科大学教育支援センター医学教育室,

<sup>3)</sup> 獨協医科大学地域医療教育センター, <sup>4)</sup> 獨協医科大学産科婦人科学, <sup>5)</sup> 壬生町立歴史民俗資料館

受付:平成29年4月10日/受理:平成29年7月13日

**要旨:** 壬生藩医五十嵐順智の御子孫より寄贈された『(異種) 解体正図』の解剖図と解剖用語の引用元を同定したところ, 解剖図の殆どは【解体発蒙】を参考にし, 解剖用語は【重訂解体新書】に基づいていることが判明した。

さらに天保11年に壬生藩で行われた解剖の記録図で殆どの解剖図と解剖用語を【医範提綱内象銅版図】及び【和蘭内景医範提綱】より引用している『解体正図』と比較検討して両者の相違点と相似点を明らかにし, 『(異種) 解体正図』の制作者や製作時期とその役割について考察した。

その結果, 『(異種) 解体正図』が壬生での解剖前に制作され『解体正図』の参考元となった可能性と, 二代目五十嵐順智の解剖への深い関わりが示唆された。

**キーワード:** (異種) 解体正図, 解体正図, 五十嵐順智, 壬生藩, 解剖

## 【目 的】

平成26年(2014)8月に壬生藩医五十嵐順智の御子孫である栃木市西方町金崎の五十嵐家より, 1000点を超す古文書史料が獨協医科大学に寄贈され, 「五十嵐三男家文書」として教育支援センター医史学研究室で管理することになった。この内200点を超す医学関連史料は栃木県下都賀郡壬生町における近代医療史を知るうえで極めて貴重である。特に, 天保11年(1840)に壬生藩で行われた人体解剖の記録図である『解体正図』は壬生近代医療の曙の象徴と言える。またこれとは別の解剖図であり, 中野正人氏が発見した『(異種) 解体正図』も含まれている。『(異種) 解体正図』の存在については平成23年(2011)発行の獨協学園資料センター研究年報第三号に掲載された論文<sup>1)</sup>内で初めて紹介された。

本研究では, 『(異種) 解体正図』と『解体正図』の主要な引用元と考えられる【解体発蒙】や【医

範提綱内象銅版図』の解剖図の同定, 及び両者で使用された解剖用語の引用元の同定を行なった。そして『(異種) 解体正図』と『解体正図』の解剖図と解剖用語を比較検討することで, 両者の関係性, 更に『(異種) 解体正図』の制作者及び制作時期やその果たした役割について考察することを目的とした。

## 【背 景】

### 1. 壬生藩医: 五十嵐家について (図1)

図1のごとく, 壬生藩医五十嵐順智は3人存在している。五十嵐家の始祖である五十嵐道純は享保19年(1734)に会津郡阿久津村に生まれ, 会津藩医の正木氏の養子となるも宝暦12年(1762)に下野国鹿沼宿に移住して荒岡道純と名乗り, 明和5年(1768)に同国金崎宿へ移住した<sup>2)</sup>。

道純の子が初代五十嵐順智である。初代順智は明和5年(1768)に生まれ, 江戸にて因州藩医中村元儀に学んだ後に金崎宿で医業を開業した。天

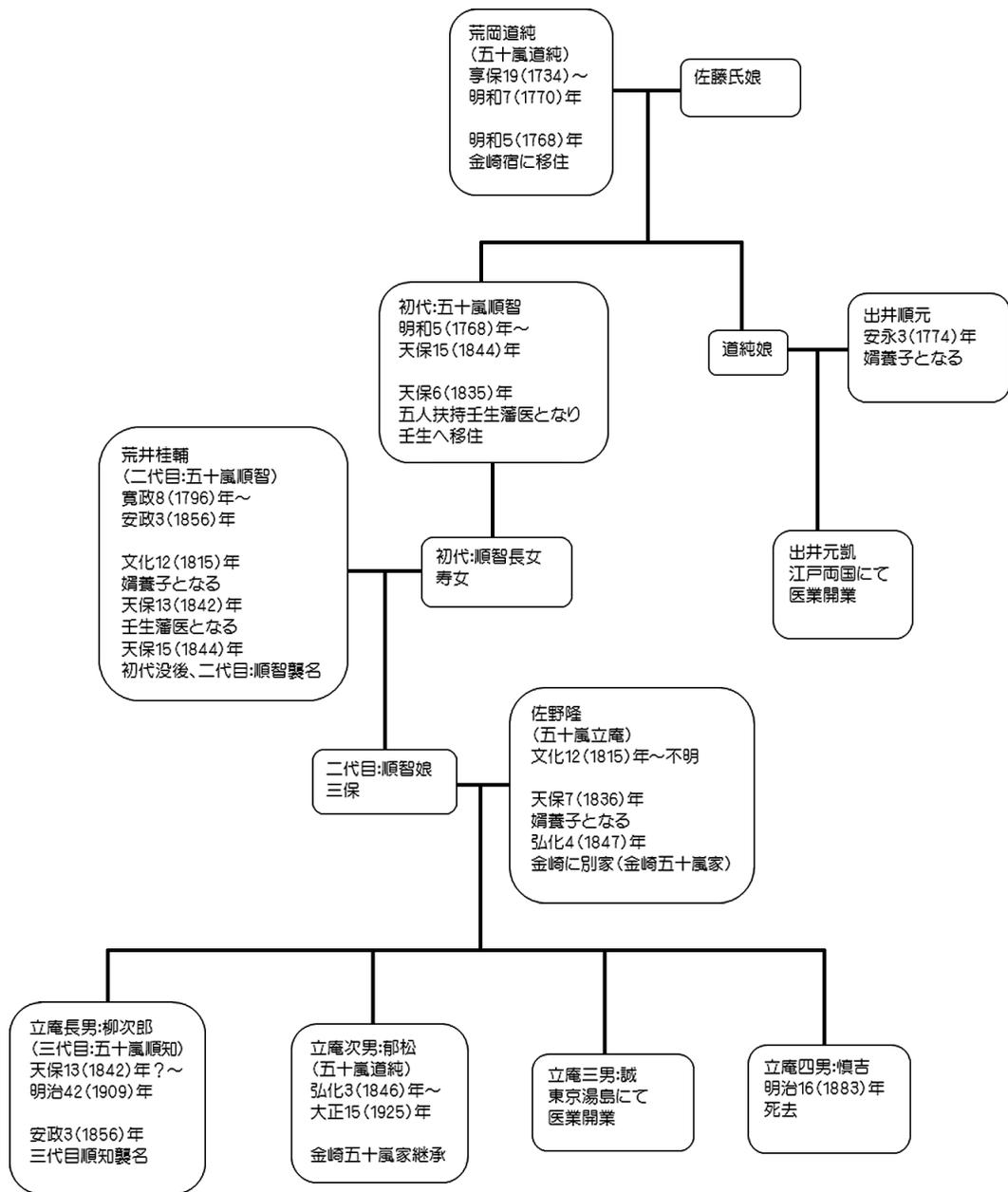


図1 壬生藩医：五十嵐家 略系図

保6年(1835)に五人扶持の壬生藩医となり壬生に移住し、天保7年(1836)に小番次席七人扶持、さらに表席給人格次席、天保8年(1837)には御譜代となって拾人扶持奥医師となった。天保14年(1843)に城内診察業務を免ぜられ、翌天保15年(1844)4月に死去した<sup>2)</sup>。

寛政8年(1796)に生まれた都賀郡梁村出身の

荒井桂輔は江戸の吉益東洞門下(古方派)の二宮桃亭に学んだ。彼は文化12年(1815)に初代順智の婿養子となり、天保13年(1842)に壬生藩医となった。その後天保15年(1844)に初代が亡くなり、二代目五十嵐順智を襲名した<sup>2)</sup>。なお、五十嵐桂輔名で給人医師・拾人扶持との記載が弘化年間(1844~1848)の【鳥居家野州分限帳(人

見武家文書】に認められている<sup>3,4)</sup>。彼は漢方のみならず西洋医学にも明るく、共に壬生藩医である齋藤玄昌と石崎正達が主催した天保11年(1840)の壬生藩公認の解剖にも関わっていたと考えられる<sup>5)</sup>。さらに下野で最も早く牛痘種痘を実施した齋藤玄昌に次いで、嘉永4年(1851)に牛痘種痘を実施し、以降玄昌らと共に壬生藩領における種痘普及に努めた。そして安政3年(1856)に死去した<sup>2)</sup>。

二代目の養子となった笠間藩士の子である佐野隆は五十嵐立庵と名乗り、弘化4年(1847)に金崎宿に別家を興して独立して開業した<sup>2)</sup>。なお便宜上、この家系を金崎五十嵐家と称する。

二代目が安政3年(1856)に亡くなると、立庵の長男である柳次郎が三代目順知(三代目のみ順智ではなく順知と表記する)を襲名して壬生の五十嵐家を継ぎ、三人扶持の壬生藩医となった。三代目は安政元年(1854)に江戸にて榊原好文に学び、安政6年(1859)には洋学を志した。榊原玄端と交流し、佐倉順天堂の佐藤尚中に入門した。文久2年(1862)閏8月には壬生藩江戸詰奥医師となった。同年12月に壬生へ帰藩した後、文久3年(1863)に六人扶持となり藩主の大坂加番に供奉して、翌元治元年(1864)に帰藩した。また同年天狗騒動の際には壬生藩兵と共に従軍した。明治3年(1870)2月に一等士族十三石となるも明治4年(1871)の廃藩置県で禄を離れた。同年大学東校で種痘免許状を交付され、明治6年(1873)に栃木県種痘医を拝命し、明治7年(1874)には栃木病院から壬生種痘所の種痘方を任命された。明治12年(1879)のコレラ流行時には検疫医として活躍した。彼は多くの役職について地域

医療に貢献し、明治42年(1909)に死去した<sup>2,6,7)</sup>。

立庵の次男である郁松は弘化3年(1846)に生まれ、五十嵐道純を名乗った。安政4年(1857)に江戸にて学び、文久3年(1863)には笠間藩医の結解素庵に入門し漢方医学を修めた。明治2年(1869)に再度上京し、大学東校にて佐藤尚中に西洋医学を学んだ。明治5年(1872)に金崎宿に帰郷し、洋学寮設立願いを栃木県に提出している。再度上京するも実家の火災のため明治7年(1874)に帰郷し、金崎五十嵐家を継いだ。その後、第一大区九小区半田種痘所種痘方・検疫医・楡木宿娼妓梅毒検査医・鹿沼警察署死体鑑定医・栃木県貧民患者施療医・栃木県監獄囚徒派遣所医員などを務め、三代目同様に地域医療に貢献した。また上都賀郡医師会役員・栃木県医会委員などの役職も務めた。明治41年(1908)に医会を退会し、大正15年(1926)に死去した<sup>2,8,9,10)</sup>。

なお『(異種)解体正図』および『解体正図』は金崎五十嵐家に受け継がれてきた。

## 2. 壬生藩官許の人体解剖と『解体正図』の成り立ち(表1)

天保11年(1840)12月11日に、壬生藩医の齋藤玄昌と石崎正達は関東諸藩において初めて公認された人体解剖を実施した。前年の天保10年(1839)には蘭学者に対する言論弾圧事件である蛮社の獄が起こり、幕府は蘭学抑制の方針であったが、六代壬生藩主である鳥居忠孝は当時奏者番という幕府の要職にありながらも、実学の有用性に理解を示して蘭方医学の基礎である人体解剖を正式に許可した。解剖場所は壬生上河岸の刑場であった。主宰者は齋藤玄昌と石崎正達の2名で

表1 5種の解体正図

解体正図種類	①壬生町立歴史民俗資料館所蔵	②武田科学振興財団杏雨書屋所蔵	③獨協医科大学所蔵(五十嵐三男家文書)	④浜松医科大学附属図書館所蔵	⑤鹿沼市教育委員会所蔵
奥付の名前記載	高倉東湖のみ	高倉東湖のみ	高倉東湖, 齋藤玄昌, 石崎正達	高倉東湖, 齋藤玄昌, 石崎正達	高倉東湖, 齋藤玄昌, 石崎正達
オリジナル/模写人物	不明	不明	不明	不明	塩山村(鹿沼市)の鍼灸医: 小森雲石による写本(明治8年)
備考		裏表紙裏に「匂坂梅俊著之」の追記あり	金崎五十嵐家 伝来	荒川家より浜松医科大学へ寄贈(石崎家旧蔵品)	

あるが、二代目五十嵐順智（当時は五十嵐桂輔）や同じ壬生藩医の匂坂梅俊も参加した模様である<sup>4,5,11,12</sup>。

本解剖の記録図として『解体正図』が絵師の高倉東湖の筆で制作された。高倉東湖に関する資料は現在見つからないため詳細は不明である。現存する『解体正図』は5種類確認されているがいずれも写本と考えられ、高倉東湖オリジナル版は正確には同定されていない<sup>5</sup>。奥付に高倉東湖の名前のみ記載されているものが2部、絵師と共に齋藤玄昌と石崎正達の名前も記載されているものが3部で、その内の一つが五十嵐三男家文書に含まれている。

五十嵐三男家文書の『解体正図』は縦帳に仕立てられ、表紙と8葉の手書きの解剖図と奥付及び裏表紙より成る。各解剖図の大きさは縦26.5cm横19.5cmである。解剖図の内容水準は高く、脳神経や脳血管、リンパ管にまで言及しており、常識的に考えて1日の解剖で制作することは不可能な内容である。酒井シヅ氏による詳細な検討により、文化5年（1808）に津山藩医である宇田川玄真により刊行された【医範提綱内象銅版図】を参考に行っていることが判明している<sup>13,14</sup>。この図版は宇田川玄真が西洋の医学書を数冊翻訳してその要点をまとめ、文化2年（1805）に刊行した【和蘭内景医範提綱】の附図で、銅版師の亜欧堂田善により西洋の解剖書の図を日本で初めて銅版画で再現したものである。当時から明治初期まで西洋医学の入門書として広く用いられていた。

### 3. 『(異種) 解体正図』の構成

五十嵐三男家文書の『(異種) 解体正図』は縦帳仕立てで、表紙と手書きの19葉の解剖図より成り、奥付はなく、裏表紙は19葉目の図そのものとなっている。各解剖図の大きさは縦32cm横23cmである。表紙には『解体正図』とは異なり、右下に「五十嵐氏」の記載があるのみで、特に表題は記載されていない。また、奥付がないため制作者氏名、制作時期に関する情報は無い。そして『(異種) 解体正図』は現在、五十嵐三男家文書における一部以外は確認されていない。

中野正人氏により、文化10年（1813）に漢蘭折中派の医師である三谷樸により刊行された【解体発蒙】を参考に行っていることが判明している<sup>1</sup>。三谷は享和2年（1802）12月に荻野元凱の門下生2名が主宰した男性人体解剖に参加し、その記録を基に【解体発蒙】を著作したが、既刊の解剖書である【医範提綱内象銅版図】、【解体新書】や過去の解剖記録図、西洋の解剖書なども参考にして多色刷り木版印刷の解剖図を制作した。彼は本書で中国の五臓六腑説と日本や西洋における実際の解剖所見を牽強付会ながら融合しようと試みている。

## 【結 果】

### 1. 『(異種) 解体正図』と【解体発蒙】の比較検討結果（図2、表2）

『(異種) 解体正図』に引用されたと考えられる【解体発蒙】<sup>15</sup>の解剖図の同定を行い、かつ使用された解剖用語の比較検討結果を述べる。『(異種) 解体正図』の各解剖図には標題があるものと無いものがある。初出時及び表には原標題及び標題が無いものには便宜上の標題を記し、〈異種・葉番号・標題〉と記載した。しかし煩雑さを避けるため、本文には併せて略称も記載し、以降は各解剖図を略称によって示すこととした。

また使用された解剖用語に関して、異なる葉での重複は略した。解剖図に記載された文字は「付」とし、対応する現代の解剖用語は（）付とした。さらに比較検討のため、旧字体が使用されている場合は原則として可能な限りそのまま再現した。以後、『解体正図』【医範提綱内象銅版図】【和蘭内景医範提綱】【重訂解体新書】との比較の際も同様に表示した。

〈異種・第1葉・鋸截去腦蓋隔薄腦膜見脳図、脳上面圖〉（略称〈異種・1・脳〉〈異種・1・脳上面〉）（図2-1-1）

〈異種・1・脳〉に相当する解剖図は【解体発蒙】には認められない。しかし、構図と標題の相似より【医範提綱内象銅版図】<sup>16</sup>の「第一図：鋸截去腦蓋剥腦膜見脳及鎌状管」（図2-1-3）からの引用と思われる。

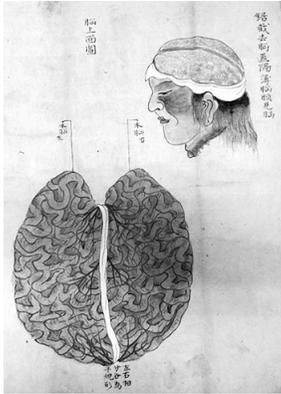


図2-1-1 (異種) 解体正図 第1葉

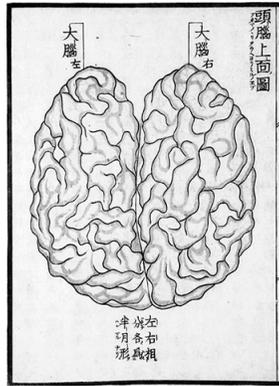


図2-1-2 解体発蒙「頭腦上面ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

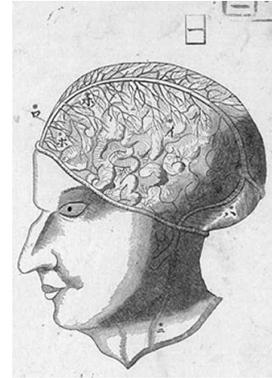


図2-1-3 医範提綱内象銅版図

「鋸截去腦蓋剥離膜見脳及鎌状管」  
※国立国会図書館ウェブサイトから転載

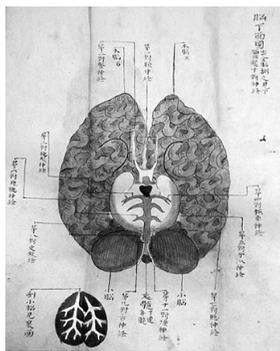


図2-2-1 (異種) 解体正図 第2葉

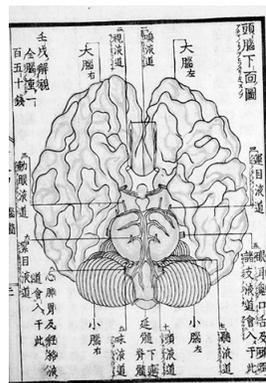


図2-2-2 解体発蒙「頭腦下面ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

一方、〈異種・1・脳上面〉は構図と標題の相似より【解体発蒙】の「頭腦上面ノ圖」(図2-1-2)からの引用と思われる。

(大脳)(大脳半球)を『(異種) 解体正図』では「本脳」「半規形」、【解体発蒙】では「大脳」「半月形」と記載しており、相違が認められる。

左右に分かれる大脳半球の説明が『(異種) 解体正図』では「左右相分各為半規形」、【解体発蒙】では「左右相分各為半月形」と類似している。

〈異種・第2葉・脳下面圖, 剖小脳見裏面圖〉(略称〈異種・2・脳下面〉〈異種・2・小脳裏面〉(図2-2-1)

〈異種・2・脳下面〉は全体の構図と標題, 脳底

動脈の描写や脳神経名称を示す線の引き方の相似より【解体発蒙】の「頭腦下面ノ圖」(図2-2-2)を引用していると思われる。なお、『(異種) 解体正図』では第十神経を「第十一對項神経」と記載しているが、これは【解体発蒙】の「頭腦下面ノ圖」を模写する際に、脳神経名称を示す線を誤って漢字の“一”と認識したものと考えられる。

〈異種・2・小脳裏面〉は【解体発蒙】に相当する図が無く、引用元は不明である。

(各10対の脳神経)を『(異種) 解体正図』では「第一對顳神経」「第二對監神経」「第三對旋眼神経」「第四對輻車神経」「第五對分派神経」「第六對外旋神経」「第七對聴神経」「第八對走散経



図2-3 (異種) 解体正図 第3葉

「第九對舌神經」「第十一對項神經」，【解体発蒙】では「一嗅液道」「二視液道」「三動眼液道」「四運目液道」「五眼耳鼻口舌及頭面諸支液道」「六祭目液道」「七聽液道」「八心肺胃及経絡液道」「九味液道」「十頸液道」と記載しており、相違が認められる。

(小脳)、延髄と脊髄の連続性の説明は両者とも一致して「小脳」「延髄下連脊髄」と記載されている。

〈異種・第3葉・耳下腺図, 耳小骨図, 舌骨図〉(略称〈異種・3・耳下腺〉〈異種・3・耳小骨〉〈異種・3・舌骨〉)(図2-3)

〈異種・3・耳下腺〉〈異種・3・耳小骨〉〈異種・3・舌骨〉には【解体発蒙】に相当する図が無く、引用元の考察は『(異種) 解体正図』と【重訂解体新書銅版全図】の比較検討結果において後述する。

(舌骨)は『(異種) 解体正図』も【解体発蒙】本文も一致して「舌骨」と記載されている。その他『(異種) 解体正図』に記載された解剖用語に対応する記載は【解体発蒙】本文には無い。

〈異種・第4葉・眼目諸圖〉(略称〈異種・4・眼球〉)(図2-4)

〈異種・4・眼球〉には【解体発蒙】に相当する図が無く、引用元は不明である。

『(異種) 解体正図』に記載された解剖用語に対応する記載は【解体発蒙】本文には無い。

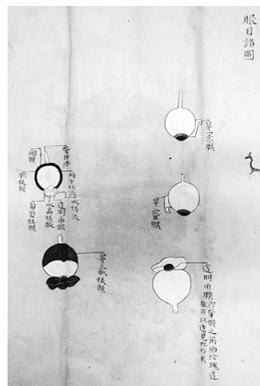


図2-4 (異種) 解体正図 第4葉

〈異種・第5葉・藏府前面總圖〉(略称〈異種・5・内臓前面〉)(図2-5-1)

構図の相似と標題の一致より【解体発蒙】の「藏府前面ノ總圖」(図2-5-2)を引用していると思われる。

(横隔膜)(盲腸)(下大静脈)(虫垂)を『(異種) 解体正図』では「横膈」「盲腸」「静脈下幹」「蟲様垂」，【解体発蒙】では「(横)膈膜」「闌門」「絡脈大幹」「蟲腸」と記載しており、相違が認められる。

(胃)(肺)(脾臓)(食道)(直腸)(膀胱)(肝臓)(胆嚢)は両者とも一致して「胃」「肺」「脾」「食道」「直腸」「膀胱」「肝」「膽」と記載している。

(小腸)(大腸)(十二指腸)(気管)は『(異種) 解体正図』では「薄腸」「厚腸」「十二指腸」「気管」とのみ記載されている一方，【解体発蒙】本文では「小腸(薄腸, 和腸, 廻腸)」「大腸(厚腸)」「十二指腸(下胃)」「気管(气道)」と複数の用語が記載されている。

〈異種・第6葉・臟腑後面總圖〉(略称〈異種・6・内臓後面〉)(図2-6-1)

構図の相似より【解体発蒙】の「藏府後面ノ總圖」(図2-6-2)を引用していると思われる。

(大動脈)(尿管)(腸間膜)を『(異種) 解体正図』では「動脈大幹」「輸尿管」「腸隔」，【解体発蒙】では「経脈大幹」「尿道」「下膈膜」と記載しており、相違が認められる。

(肛門)は両者とも一致して「肛門」と記載し

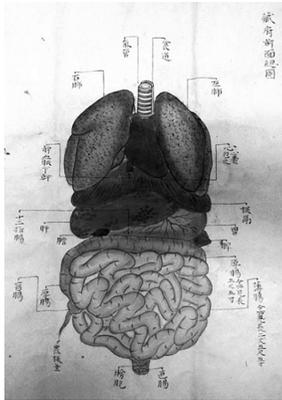


図 2-5-1 (異種) 解体正図 第5葉

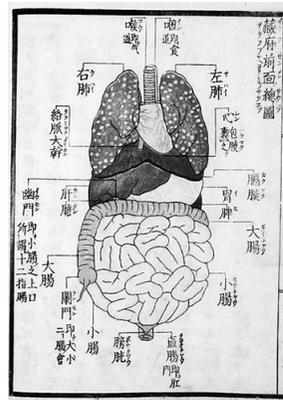


図 2-5-2 解体発蒙「藏府前圖ノ總圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

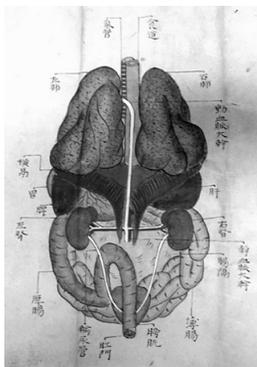


図 2-6-1 (異種) 解体正図 第6葉

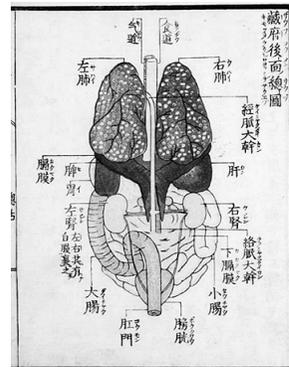


図 2-6-2 解体発蒙「藏府後圖ノ總圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

ている。

〈異種・第7葉・気管肺図, 喉頭軟骨詳細図〉(略称〈異種・7・気管肺〉〈異種・7・喉頭軟骨〉)(図 2-7-1)

〈異種・7・気管肺〉〈異種・7・喉頭軟骨〉には【解体発蒙】に相当する図が認められない。しかし、構図や〈異種・7・気管肺〉と〈異種・7・喉頭軟骨〉の配置の相似より【医範提綱内象銅版図】の「第八図：喉頭気管肺連屬之前面並開兩肺之合見気管支肺血脈入于肺」(図 2-7-2)を引用していると思われる。

(喉頭蓋軟骨)(披裂軟骨)を『(異種)解体正図』では「會厭軟骨」「披裂軟骨」,【解体発蒙】本文では「會厭」「披裂」と記載しており,類似して

いる。その他『(異種)解体製図』に記載された解剖用語に対応する記載は【解体発蒙】本文には無い。

〈異種・第8葉・心臓前面図, 心臓冠状断面図〉(略称〈異種・8・心臓〉〈異種・8・心臓断面〉)(図 2-8-1)

【解体発蒙】の「心去包膜圖」「縦剖心視兩室之分圖」に類似している。しかし、構図や大血管の配置等のより一層の相似性より【医範提綱内象銅版図】の「第十一図：脱心囊見心及兩耳」「第十二図：縦剖心見心室」(図 2-8-2)を引用していると思われる。

(肺動脈)(肺静脈)(冠状動脈：推定)を『(異種)解体正図』では「肺動血脈」「肺静血脈」「血

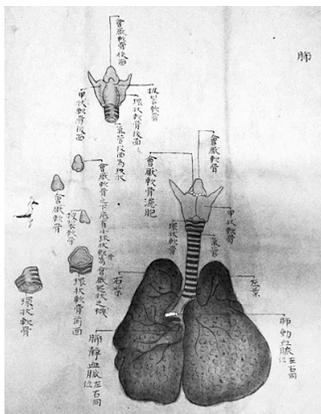


図2-7-1 (異種) 解体正図 第7葉

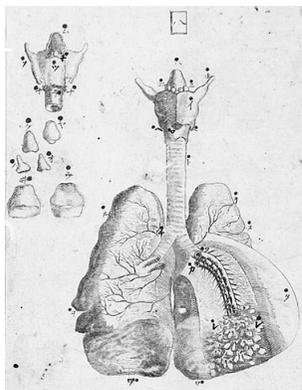


図2-7-2 医範提綱内象銅版図

「喉頭気管肺連屬之前面並開兩肺之合見氣管支肺血脈入于肺」  
※国立国会図書館ウェブサイトから転載

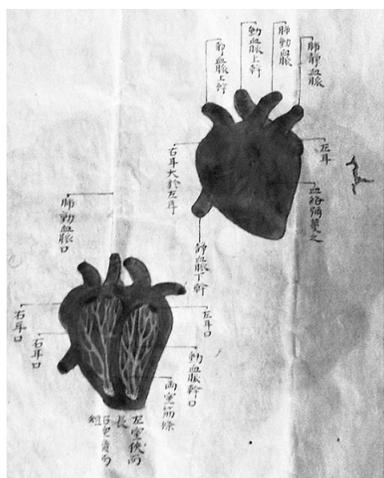


図2-8-1 (異種) 解体正図 第8葉

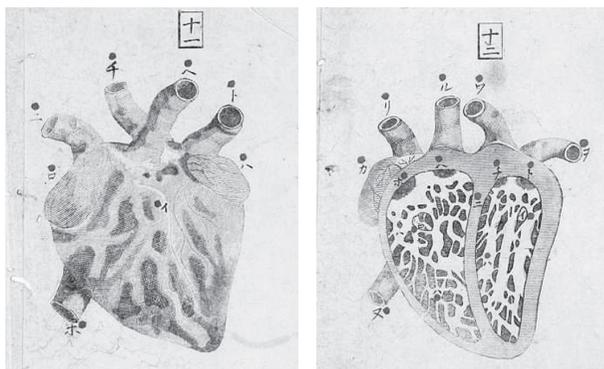


図2-8-2 医範提綱内象銅版図「脱心囊見心及兩耳」「縦割心見心室」  
※国立国会図書館ウェブサイトから転載

絡彌蔓之」,【解体発蒙】では「肺経脈」「肺絡脈」「心之包絡」と記載しており,相違が認められる.

(心臓) (左心耳) (右心耳) (左心室) (右心室) は両者とも一致して「心」「左耳」「右耳」「左室」「右室」と記載している.

〈異種・第9葉・横膈下面圖〉(略称〈異種・9・横隔膜〉)(図2-9-1)

構図の類似より【解体発蒙】の「膈膜下面ノ圖」(図2-9-2)を引用していると考えられる.

3つの孔の説明が『(異種) 解体正図』では「食道所穿之竅」「動血脈大幹所經之處」「静血脈大幹所貫之竅」,【解体発蒙】では「食道所穿之竅」「經

脈大幹所經之處」「絡脈大幹所貫之竅」と類似している.

〈異種・第10葉・剥總披見腹筋畧圖〉(略称〈異種・10・腹筋〉)(図2-10)

〈異種・10・腹筋〉には【解体発蒙】に相当する図が無く,引用元は不明である.

(臍)は『(異種) 解体正図』も【解体発蒙】本文も一致して「臍」と記載されている. その他『(異種) 解体正図』に記載された解剖用語の対応する記載は【解体発蒙】本文には無い.

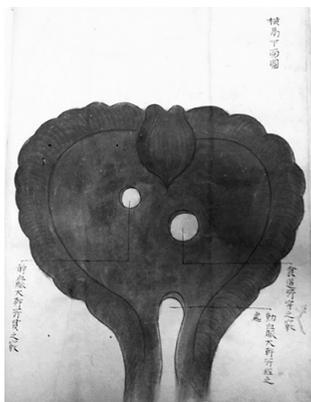


図2-9-1 (異種) 解体正図 第9葉

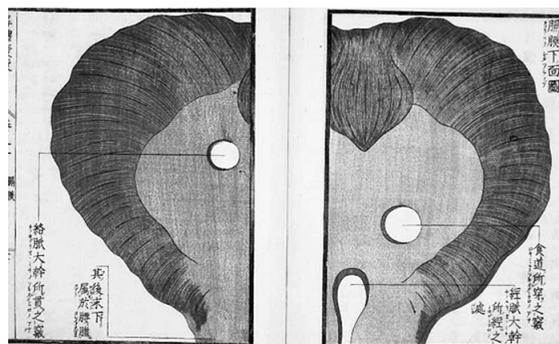


図2-9-2 解体発蒙「膈膜下面ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

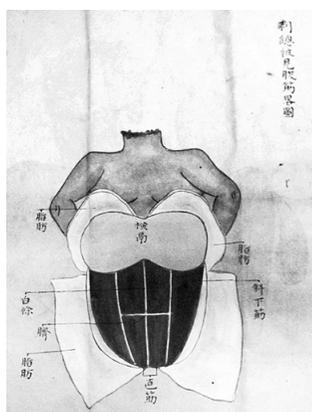


図2-10 (異種) 解体正図 第10葉

〈異種・第11葉・胃十二指腸脾管総胆管脾臓図〉(略称〈異種・11・胃十二指腸脾胆脾〉)(図2-11-1)

構図の相似より【解体発蒙】の「中臈府竝於胃腐熟水穀圖」(図2-11-2)を引用していると思われる。

(脾臓)を『(異種) 解体正図』では「臈」、【解体発蒙】では「中臈府」と記載しており、相違が認められる。

十二指腸乳頭の説明の記載が『(異種) 解体正図』では「膽汁臈液會於此入十二指腸」、【解体発蒙】では「膽汁臈液會於此入于幽門孔」と類似している。

〈異種・第12葉・胃全形図, 脾全形図〉(略称〈異種・12・胃〉〈異種・12・脾〉)(図2-12-1)

構図の相似より【解体発蒙】の「胃府引水滿之圖」「脾」(図2-12-2)を引用していると思われる。

(噴門)(幽門)を両者とも一致して「胃上口」「胃下口」と記載している。

〈異種・第13葉・肝前面圖〉(略称〈異種・13・肝〉)(図2-13-1)

構図と標題の相似より【解体発蒙】の「肝藏前面ノ圖」(図2-13-2)を引用していると思われる。

〈異種・第14葉・門脈全形圖〉(略称〈異種・14・門脈〉)(図2-14-1)

構図と標題の相似より【解体発蒙】の「門脈全形ノ圖」(図2-14-2)を引用していると思われる。

(左結腸静脈)(下腸間膜静脈)(脾静脈)(左胃大網静脈)(短胃静脈)(左胃静脈)(胆嚢静脈)(空回腸静脈・回結腸静脈・右結腸静脈・中結腸静脈・S状結腸静脈・上直腸静脈)(脾十二指腸静脈)(右胃大網静脈)(上腸間膜静脈)を『(異種) 解体正図』では「内行孌脈」「腸網左脈」「臈脈」「胃腸網左脈」「短脈」「胃左脈」「臈脈」「腸隔脈」「十二指腸脈」「胃腸網右脈」「腸網右脈」、【解体発蒙】では「直腸之復脈」「盲膜之左復脈」「中臈之復脈」「胃及盲膜之左復脈」「脾之復脈」「胃之左復脈」「臈之復脈」「所起始之支別出於腸及下膈膜」「幽門之復脈」「胃及盲膜之右復脈」「盲膜之右復脈」と記載しており、相違が認められる。

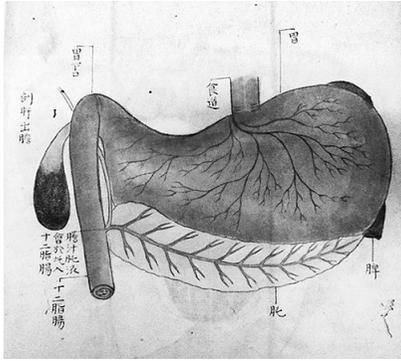


図 2-11-1 (異種) 解体正図 第 11 葉

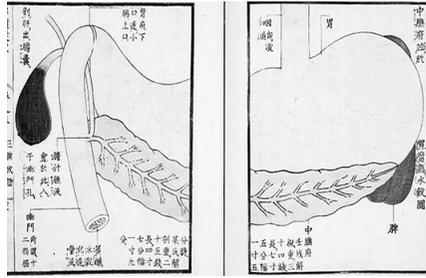


図 2-11-2 解体発蒙「中脘府並於胃腐熱水殻圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

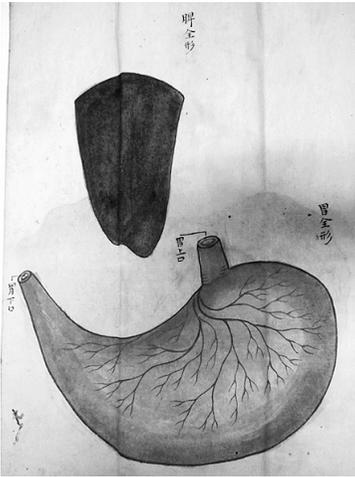


図 2-12-1 (異種) 解体正図 第 12 葉

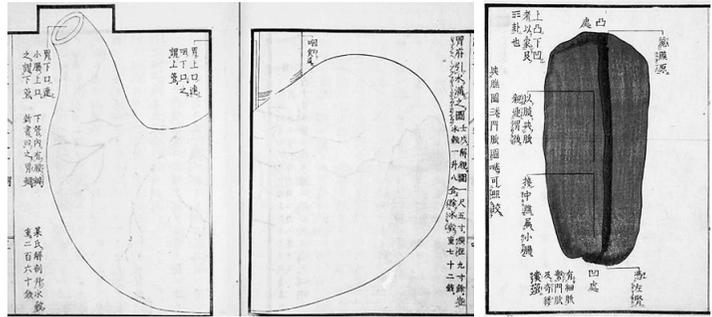


図 2-12-2 解体発蒙「胃府引水満之圖」

「脾」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用



図 2-13-1 (異種) 解体正図 第 13 葉

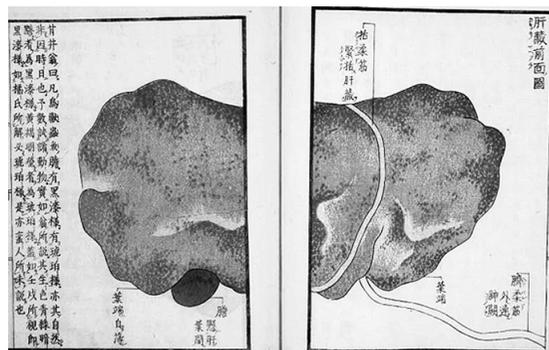


図 2-13-2 解体発蒙「肝藏前面ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

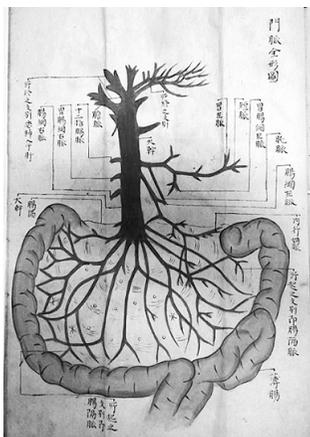


図 2-14-1 (異種) 解体正図 第 14 葉

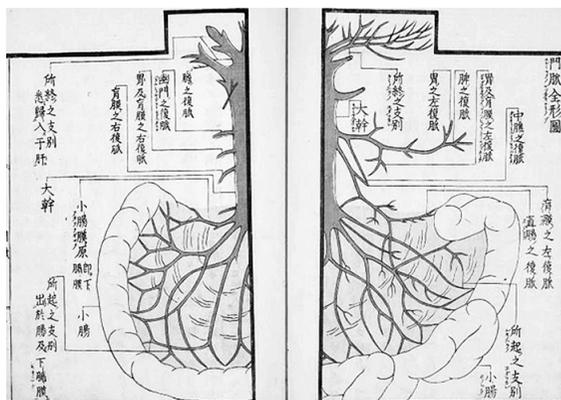


図 2-14-2 解体発蒙「門脈全形ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

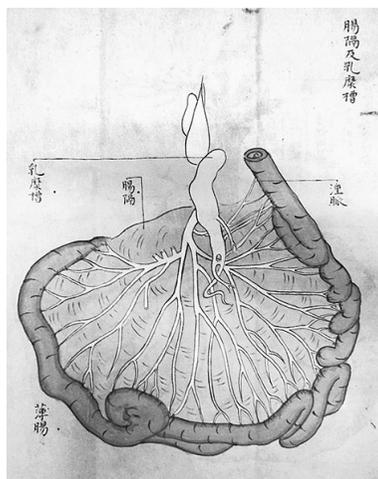


図 2-15-1 (異種) 解体正図 第 15 葉

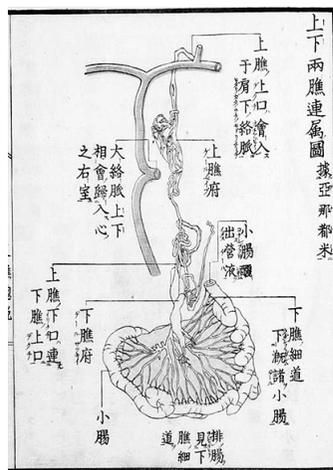


図 2-15-2 解体発蒙「上下兩臍連属ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

(門脈)(門脈幹)は両者とも一致して「門脈」「大幹」と記載している。

〈異種・第 15 葉・腸隔及乳糜槽図〉(略称〈異種・15・腸間膜〉)(図 2-15-1)

構図の相似より【解体発蒙】の「上下兩臍連属ノ圖」(図 2-15-2)の下半分を引用していると思われる。

(乳ビ槽)(腸間膜のリンパ管)を『(異種) 解体正図』では「乳糜槽」「滯脈」,【解体発蒙】では「下臍府」「下臍細道」と記載しており,相違が認められる。

〈異種・第 16 葉・水脈根源圖〉(略称〈異種・16・水脈〉)(図 2-16-1)

構図と標題の相似より【解体発蒙】の「水道根原ノ圖」(図 2-16-2)の図を引用していると思われる。

(腸間膜以外のリンパ管)を『(異種) 解体正図』では「水脈」,【解体発蒙】では「水道」と記載しており,相違が認められる。

リンパ管の乳糜槽との合流部の説明,起始部の説明が『(異種) 解体正図』では「滯湊于乳糜槽」「所起始」,【解体発蒙】では「滯湊于下臍府」「所

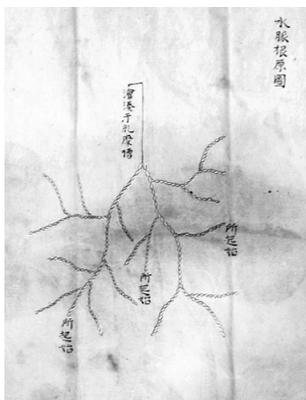


図 2-16-1 (異種) 解体正図 第 16 葉

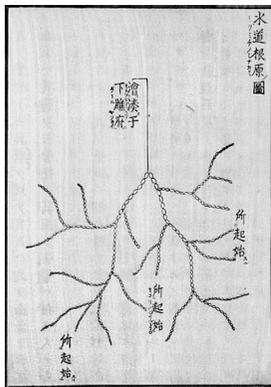


図 2-16-2 解体発蒙「水道根原ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

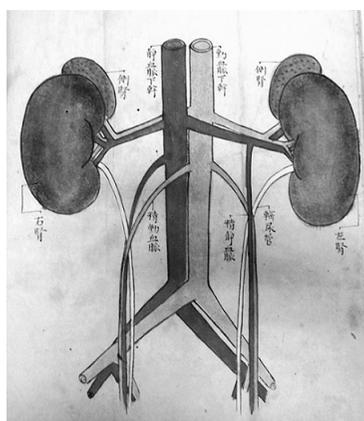


図 2-17-1 (異種) 解体正図 第 17 葉

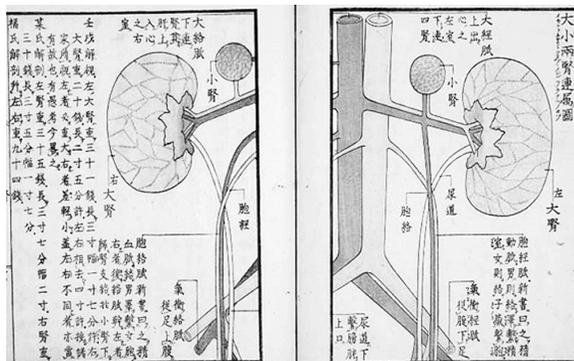


図 2-17-2 解体発蒙「大小兩腎連属ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

起始」と類似している。

〈異種・第 17 葉・泌尿器脈管図〉(略称〈異種・17・腎脈管〉)(図 2-17-1)

構図の相似より【解体発蒙】の「大小兩腎連属ノ圖」(図 2-17-2) を引用していると思われる。

(腎臓) (副腎) (精巢動脈) (精巢静脈) を『(異種) 解体正図』では「腎」「側腎」「精動血脈」「精静血脈」, 【解体発蒙】では「大腎」「小腎」「胞經(精經)」「胞絡(精絡)」と記載しており, 相違が認められる。

〈異種・第 18 葉・膀胱前面圖〉(略称〈異種・18・膀胱前面〉)(図 2-18-1)

構図の相似と標題の一致より【解体発蒙】の「膀胱前面ノ圖」(図 2-18-2) を引用していると思

われる。

(精囊) (前立腺) (尿道) を『(異種) 解体正図』では「精囊」「攝護」「尿管」, 【解体発蒙】では「精室」「胞膈」「小水管」と記載しており, 相違が認められる。

〈異種・第 19 葉・膀胱後面圖, 精巢図, 陰莖図〉(略称〈異種・19・膀胱後面〉〈異種・19・精巢〉〈異種・19・陰莖〉)(図 2-19-1)

〈異種・19・膀胱後面〉は構図の相似と標題の一致より【解体発蒙】の「膀胱後面ノ圖」(図 2-19-2) を引用していると思われる。一方, 〈異種・19・精巢〉〈異種・19・陰莖〉には【解体発蒙】に相当する図が無く, 引用元は不明である。

(精管) (精巢) (精巢漿膜) を『(異種) 解体正

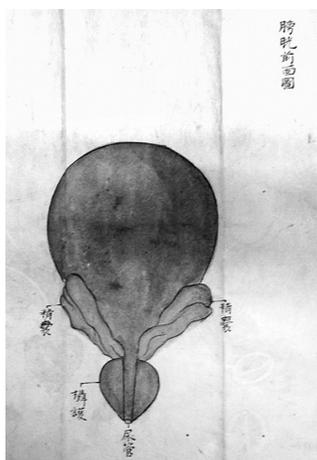


図 2-18-1 (異種) 解体正図 第 18 葉

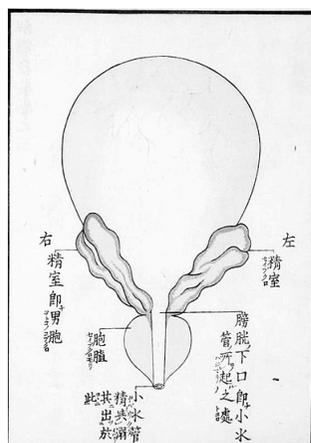


図 2-18-2 解体発蒙「膀胱前面ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

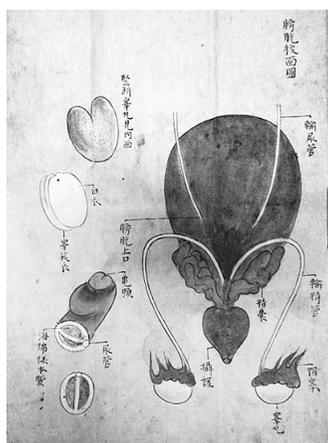


図 2-19-1 (異種) 解体正図 第 19 葉

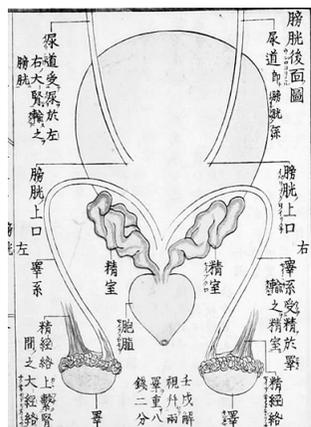


図 2-19-2 解体発蒙「膀胱後面ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍総合データベースより許可を得て使用

図』では「輸精管」「睪丸」「睪丸衣」,【解体発蒙】では「睪系」「睪」「外包ノ膜囊」と記載しており,相違が認められる。

また(精巢上体)(白膜)(陰茎海綿体)を『(異種) 解体正図』では「帽睪」「白衣」「海綿様本質」と記載しているが,【解体発蒙】本文には対応する解剖用語の記載が認められない。

(陰茎龟头)は両者とも一致して「龟头」と記載されている。

以上より,〈異種・1・脳上面〉〈異種・2・脳下面〉〈異種・5・内臓前面〉〈異種・6・内臓後面〉〈異種・9・横隔膜〉〈異種・11・胃十二指腸脾胆

脾〉〈異種・12・胃〉〈異種・12・脾〉〈異種・13・肝〉〈異種・14・門脈〉〈異種・15・腸間膜〉〈異種・16・水脈〉〈異種・17・腎脈管〉〈異種・18・膀胱前面〉〈異種・19・膀胱後面〉の14葉中15図が【解体発蒙】より引用されていると同定された。また,多くの解剖図を【解体発蒙】より引用しているが,解剖用語に関しては77個中47個と約61%の割合で相違が目立ち,【解体発蒙】以外の既刊解剖書から引用していると考えられた。

また,〈異種・1・脳〉〈異種・7・気管肺〉〈異種・7・喉頭軟骨〉〈異種・8・心臓〉〈異種・8・心臓断面〉の3葉中5図が【医範提綱内象銅版図】

表2-1 (異種) 解体正図と解体発蒙の比較表

(異種) 解体正図頁	第1葉	第2葉	第3葉	第4葉
原標題又は便宜上の表題及び略称	鋸截去腦蓋隔薄腦膜見脳図〈異種・1・脳〉、脳上面圖〈異種・1・脳上面〉	脳下面圖〈異種・2・脳下面〉、剖小脳見裏面圖〈異種・2・小脳裏面〉	耳下腺図〈異種・3・耳下腺〉、耳小骨図〈異種・3・耳小骨〉、舌骨図〈異種・3・舌骨〉	眼目諸圖〈異種・4・眼球〉
対応する解体発蒙の有無	解体発蒙にはほぼ同じ図あり「頭脳上面ノ圖」	解体発蒙にはほぼ同じ図あり「頭脳下面ノ圖」	解体発蒙に対応する図なし	解体発蒙に対応する図なし
解体発蒙との比較(相似点)	○構図 ○標題 ○大脳半球の説明	○構図 ○標題 ○各脳神経の名称を指すための線の引き方 ○小脳、延髄、脊髄に対する解剖用語 ○延髄と脊髄の連続性の説明	○舌骨に対する解剖用語	
解体発蒙との比較(相違点)	○(異種) 解体正図には〈異種・1・脳〉があるが解体発蒙にはない ○大脳、大脳半球に対する解剖用語	○(異種) 解体正図には〈異種・2・小脳裏面〉があるが解体発蒙にはない ○十対の脳神経に対する解剖用語		
備考	〈異種・1・脳〉は標題及び構図の相似より、医範提綱内象銅版図の「第一図：鋸截去腦蓋剥腦膜見脳及鎌状管」からの引用と思われる	〈異種・2・小脳裏面〉は引用元不明	(重訂解体新書銅版全図からの引用と思われる)	引用元不明

表2-2 (異種) 解体正図と解体発蒙の比較表

(異種) 解体正図頁	第5葉	第6葉	第7葉	第8葉
原標題又は便宜上の表題及び略称	藏府前面總圖〈異種・5・内臓前面〉	藏府後面総図〈異種・6・内臓後面〉	気管肺図〈異種・7・気管肺〉、喉頭軟骨詳細図〈異種・7・喉頭軟骨〉	心臓前面図〈異種・8・心臓〉、心臓冠状断面図〈異種・8・心臓断面〉
対応する解体発蒙の有無	解体発蒙にはほぼ同じ図あり「藏府前面ノ總圖」	解体発蒙にはほぼ同じ図あり「藏府後面ノ總圖」	解体発蒙に対応する図なし	解体発蒙に類似した図あり「心去包膜圖」「縦剖心視兩室之分圖」
解体発蒙との比較(相似点)	○構図 ○標題 ○胃、肺、脾臓、食道、直腸、膀胱、肝臓、胆嚢、小腸、大腸、十二指腸、気管に対する解剖用語	○構図 ○肛門に対する解剖用語	○喉頭蓋軟骨、披裂軟骨に対する解剖用語	○両図の構図 ○心臓、左心耳、右心耳、左心室、右心室に対する解剖用語
解体発蒙との比較(相違点)	○横隔膜、盲腸、下大静脈、虫垂に対する解剖用語	○大動脈、尿管、腸間膜に対する解剖用語		○肺動脈、肺静脈、冠状動脈(推定)に対する解剖用語
備考			構図や〈異種・7・気管肺〉と〈異種・7・喉頭軟骨〉の配置の相似より、医範提綱内象銅版図の「第八図：喉頭気管肺連屬之前面並開兩肺之合見氣管支肺血脈入于肺」を引用していると思われる	構図や大血管の描写の相似性より、医範提綱内象銅版図の「第十一図：脱心囊見心及兩耳」「第十二図：縦剖心見心室」を引用していると思われる

より引用されており、引用元が不明なのは〈異種・2・小脳裏面〉〈異種・3・耳下腺〉〈異種・3・耳小骨〉〈異種・3・舌骨〉〈異種・4・眼球〉〈異種・10・腹筋〉〈異種・19・精巣〉〈異種・19・陰

茎〉の5葉中の8図であった。

最後に『(異種) 解体正図』の解剖図の順番と、【解体発蒙】の解剖図及び本文の順番を比較検討した結果を述べる。

表 2-3 (異種) 解体正図と解体発蒙の比較表

(異種) 解体正図頁	第 9 葉	第 10 葉	第 11 葉	第 12 葉
原標題又は便宜上の表題及び略称	横膈下面圖〈異種・9・横膈膜〉	剥總披見腹筋器圖〈異種・10・腹筋〉	胃十二指腸脾管総胆管脾臓圖〈異種・11・胃十二指腸脾胆脾〉	胃全形圖〈異種・12・胃〉, 脾全形圖〈異種・12・脾〉
対応する解体発蒙の有無	解体発蒙にほぼ同じ図あり「膈膜下面ノ圖」	解体発蒙に対応する図なし	解体発蒙にほぼ同じ図あり「中膈府竝於胃腐熱水殻圖」	解体発蒙にほぼ同じ図あり「胃府引水滿之圖」「脾」
解体発蒙との比較(相似点)	○構図 ○3つの孔の説明	○膈に対する解剖用語	○構図 ○十二指腸乳頭の説明	○構図 ○噴門, 幽門に対する解剖用語
解体発蒙との比較(相違点)			○脾臓に対する解剖用語	
備考		引用元不明		

表 2-4 (異種) 解体正図と解体発蒙の比較表

(異種) 解体正図頁	第 13 葉	第 14 葉	第 15 葉	第 16 葉
原標題又は便宜上の表題及び略称	肝前面圖〈異種・13・肝〉	門脈全形圖〈異種・14・門脈〉	腸膈及乳糜槽圖〈異種・15・腸間膜〉	水脈根源圖〈異種・16・水脈〉
対応する解体発蒙の有無	解体発蒙にほぼ同じ図あり「肝藏前面ノ圖」	解体発蒙にほぼ同じ図あり「門脈全形ノ圖」	解体発蒙に類似した図あり「上下兩膈連属ノ圖」の下半分	解体発蒙にほぼ同じ図あり「水道根原ノ圖」
解体発蒙との比較(相似点)	○構図 ○標題	○構図 ○標題 ○門脈, 門脈幹に対する解剖用語	○構図	○構図 ○標題 ○リンパ管の乳糜槽との合流部, 起始部の説明
解体発蒙との比較(相違点)		○門脈各枝に対する解剖用語	○乳ビ槽, 腸間膜のリンパ管に対する解剖用語	○腸間膜以外のリンパ管に対する解剖用語
備考				

表 2-5 (異種) 解体正図と解体発蒙の比較表

(異種) 解体正図頁	第 17 葉	第 18 葉	第 19 葉
原標題又は便宜上の表題及び略称	泌尿器脈管圖〈異種・17・腎脈管〉	膀胱前面圖〈異種・18・膀胱前面〉	膀胱後面圖〈異種・19・膀胱後面〉, 精巢圖〈異種・19・精巢〉, 陰茎圖〈異種・19・陰茎〉
対応する解体発蒙の有無	解体発蒙にほぼ同じ図あり「大小兩腎連属ノ圖」	解体発蒙にほぼ同じ図あり「膀胱前面ノ圖」	解体発蒙にほぼ同じ図あり「膀胱後面ノ圖」
解体発蒙との比較(相似点)	○構図	○構図 ○標題	○構図 ○標題 ○陰茎亀頭に対する解剖用語
解体発蒙との比較(相違点)	○腎臓, 副腎, 精巢動脈, 精巢静脈に対する解剖用語	○精囊, 前立腺, 尿道に対する解剖用語	○(異種) 解体正図には解体発蒙にはない〈異種・19・精巢〉, 〈異種・19・陰茎〉がある ○精管, 精巢, 精巢漿膜に対する解剖用語
備考			〈異種・19・精巢〉, 〈異種・19・陰茎〉は引用元不明

『(異種) 解体正図』では①頭部(中枢神経系), ②頭部(感覚器系), ③胸腹部内臓全体, ④胸部(呼吸器系), ⑤胸部(循環器系), ⑥腹部(外皮・筋系), ⑦腹部(消化器系), ⑧腹部(循環器系: 門脈系), ⑨腹部(リンパ系), ⑩骨盤部(泌尿生殖器系)と、頭部から順に身体の下部へ向かう流

れである。

一方、【解体発蒙】では①胸腹部内臓全体、②胸部(呼吸器系)、③胸部(循環器系)、④腹部(消化器系)、⑤骨盤部(泌尿生殖器系)、⑥腹部(消化器系)、⑦腹部(リンパ系)、⑧全身の循環器系、⑨腹部(循環器系:門脈)、⑩末梢神経、⑪頭部(中枢神経系)と、胸部から始まり順に身体の下部へ向かうも途中で再度上部へ移り、明らかに『(異種)解体正図』の流れとは相違が認められた。

## 2. 『解体正図』と【医範提綱内象銅版図】【和蘭内景医範提綱】の比較検討結果(図3, 表3)

次に『解体正図』に引用されたと考えられる【医範提綱内象銅版図】<sup>16)</sup>の解剖図の同定を行うと共に、使用された解剖用語を【医範提綱内象銅版図】【和蘭内景医範提綱】<sup>17)</sup>の用語と比較検討した結果を述べる。第1葉における大脳上面図以外の『解体正図』の各解剖図には標題が記されているため、初出時及び表には原標題を使用し〈正図・葉番号・標題〉と記載した。しかし煩雑さを避けるため、本文には併せて略称も記載し、以降は各解剖図を略称によって示すこととした。

〈正図・第1葉・鋸截去腦蓋剥腦膜見腦及鎌狀管図、大脳上面図〉(略称〈正図・1・脳〉〈正図・1・脳上面〉)(図3-1-1)

〈正図・1・脳〉は構図の相似と標題名の一致より【医範提綱内象銅版図】の「第一図:鋸截去腦

蓋剥腦膜見腦及鎌狀管」及び「第二図:鋸截去腦蓋剥腦膜扁截前腦見黑白二髓」(図3-1-3)からの引用と思われる。

また、〈正図・1・脳上面〉に相当する解剖図は【医範提綱内象銅版図】には認められない。構図の相似より【解体発蒙】の「頭腦上面ノ圖」(図3-1-2)からの引用と思われる。

(大脳)を『解体正図』では「本腦」、【医範提綱内象銅版図】【和蘭内景医範提綱】では「前腦」と記載しており、相違が認められる。

(大脳鎌)は両者とも一致して「鎌狀管」と記載している。

〈正図・第2葉・去腦蓋出全腦翻之見下面所起十對神經及腦動脈図、剖後腦見裏面図〉(略称〈正図・2・脳下面〉〈正図・2・小脳裏面〉)(図3-2-1)

〈正図・2・脳下面〉は構図や脳底動脈の描写の相似や数字による脳神経の表現方法、標題名の一致より【医範提綱内象銅版図】の「第三図:去腦蓋出全腦翻之見下面所起十對神經及腦動脈」(図3-2-2)を引用していると思われる。

〈正図・2・小脳裏面〉は【医範提綱内象銅版図】に相当する図が無く、引用元は不明である。

(各10対の脳神経)を『解体正図』では固有名を記載せず「脳神経十對一ヨリ至十」と記載している一方、【和蘭内景医範提綱】では「第一對嗅神経」「第二對視神経」「第三對動眼神経」「第四對運車神経」「第五對分布神経」「第六對索引神経」



図3-1-1 解体正図 第1葉

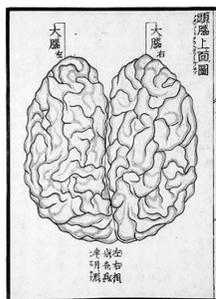


図3-1-2 解体発蒙  
「頭腦上面ノ圖」

※早稲田大学図書館古典籍  
総合データベースより  
許可を得て使用



図3-1-3 医範提綱内象銅版図

「鋸截去腦蓋剥腦膜見腦及鎌狀管」  
「鋸截去腦蓋剥腦膜扁截前腦見黑白二髓」

※国立国会図書館ウェブサイトから転載



図 3-2-1 解体正図 第 2 葉

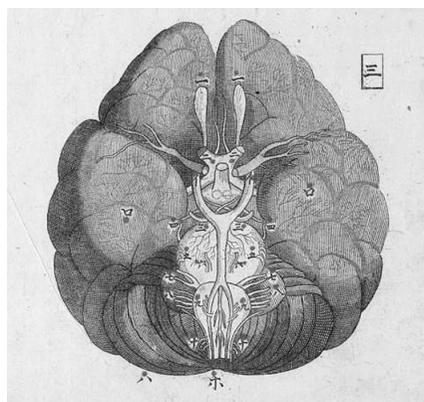


図 3-2-2 医範提綱内象銅版図

「去腦蓋出全腦翻之見下面所起十對神經及腦動脈」  
 ※国立国会図書館ウェブサイトから転載

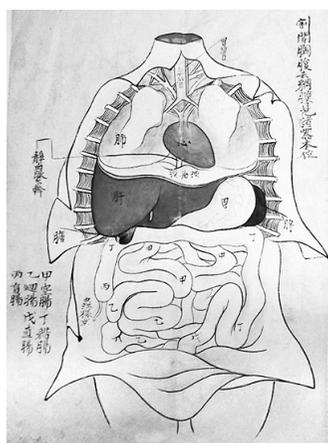


図 3-3-1 解体正図 第 3 葉

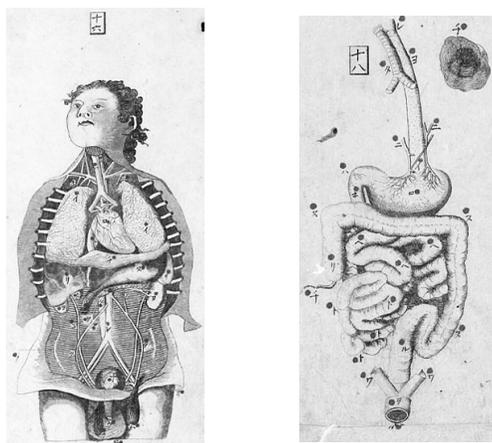


図 3-3-2 医範提綱内象銅版図

「割開胸腹去網膜腸腸間膜見諸器本位」「胃管胃腸連屬」  
 ※国立国会図書館ウェブサイトから転載

「第七對聴神経」「第八對蔓延神経」「第九對味神経」「第十對項神経」と固有な名が記載されている。

(小脳)は両者とも一致して「後腦」と記載されている。

〈正図・第 3 葉・割開胸腹去網膜見諸器本位図〉  
 (略称 〈正図・3・内臓前面〉) (図 3-3-1)

類似した標題及び構図より【医範提綱内象銅版図】の「第十六図：割開胸腹去網膜腸腸間膜見諸器本位」と「第十八図：胃管胃腸連屬」(図 3-3-2)を引用していると思われる。

(横膈膜)(気管)(食道)(胃)(空腸)(回腸)(盲

腸)(結腸)(直腸)(虫垂)(心臓)(肺)(肝臓)(胆嚢)(脾臓)は両者とも一致して「横膈膜」「気管」「胃管」「胃」「空腸」「廻腸」「盲腸」「結腸」「直腸」「蟲様垂」「心」「肺」「肝」「膽」「脾」と記載されている。

〈正図・第 4 葉・心被心囊圖，縦割心見心室図〉  
 (略称 〈正図・4・心臓〉〈正図・4・心臓断面〉)  
 (図 3-4-1)

構図の相似，標題の一致より【医範提綱内象銅版図】の「第十図：心被心囊」「第十一図：脱心囊見心及兩耳」「第十二図：縦割心見心室」(図

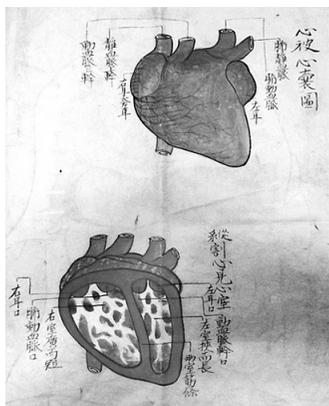


図 3-4-1 五十嵐三男家文書 解体正図 第4葉

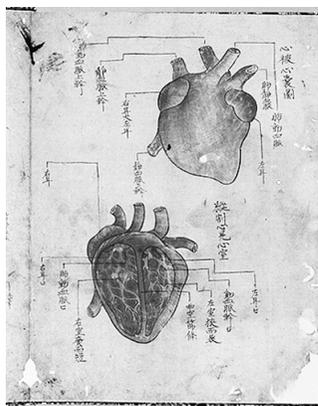


図 3-4-2 浜松医科大学附属図書館蔵 解体正図

「心被心囊圖，縦割心見心室圖」

※浜松医科大学附属図書館ホームページより許可を得て使用



図 3-4-3 医範提綱内象銅版図「心被心囊」「脱心囊見心及兩耳」「縦割心見心室」

※国立国会図書館ウェブサイトから転載

3-4-3) を引用していると思われる。しかしながら、大血管の配置が異なる点が注目される。現存する5種類の『解体正図』を比較してみると、興味深いことに浜松医科大学附属図書館所蔵である『解体正図』<sup>18)</sup>(図3-4-2)の大血管配置は極めて【医範提綱内象銅版図】に相似しており、残り4種の『解体正図』の大血管配置は【医範提綱内象銅版図】とはほぼ一致した相違を示している。仮に浜松医科大学附属図書館所蔵の『解体正図』が模写本であった場合、模写する際に『解体正図』原図よりも【医範提綱内象銅版図】を重視していたと推測される。そして、他の4種が模写したと思われる『解体正図』の原図に於いては、実際の解剖所見に基づいて描写した可能性が強く考えられ、オリジナリティが伺える。

(左心耳)(右心耳)(左心室)(右心室)(大動脈)(大静脈)(肺動脈)(肺静脈)は両者とも一致して「左耳」「右耳」「左室」「右室」「動血脈」「静血脈」「肺動血脈」「肺静血脈」と記載されている。〈正図・第5葉・喉頭気管肺連屬之前面図〉(略称〈正図・5・喉頭気管肺〉)(図3-5-1)

構図の相似、標題の一致より【医範提綱内象銅版図】の「第八図：喉頭気管肺連屬之前面並開兩肺之合見氣管支肺血脈入于肺」(図3-5-2)を引用していると思われる。

『解体正図』には【医範提綱内象銅版図】にある左肺内部の気管支・肺動静脈の描写・記載が無く、相違が認められる。

(甲状軟骨)(甲状軟骨上角・下角)(喉頭蓋軟骨)(輪状軟骨)(會厭軟骨に付属する腺組織)は

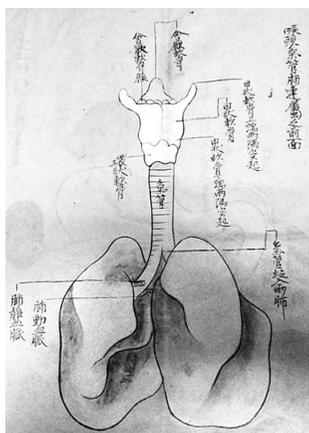


図3-5-1 解体正図 第5葉

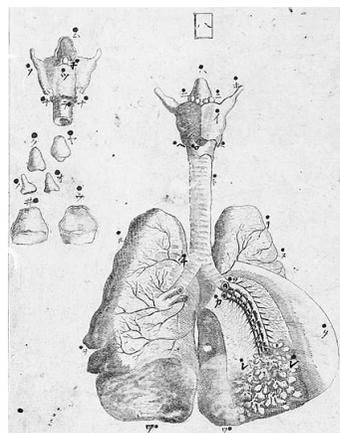


図3-5-2 医範提綱内象銅版図

「喉頭氣管肺連屬之前面並開兩肺之合見氣管支肺血脈入于肺」  
※国立国会図書館ウェブサイトから転載



図3-6-1 解体正図 第6葉

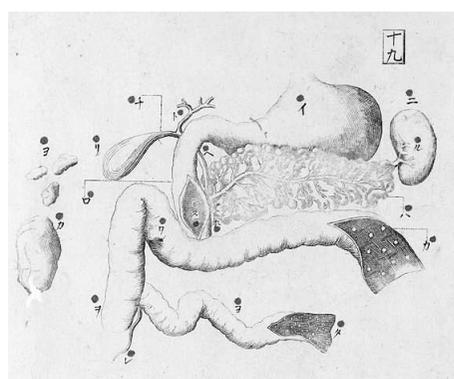


図3-6-2 医範提綱内象銅版図「胃十二指腸膵管總管連屬並蟲様垂」  
※国立国会図書館ウェブサイトから転載

両者とも一致して「甲状軟骨」「甲状軟骨上端・下端両隅突起」「會厭軟骨」「環状軟骨」「會厭軟骨（ノ）線（腺）」と記載されている。

〈正図・第6葉・十二指腸膵管總管連屬図〉（略称〈正図・6・十二指腸膵胆脾〉）（図3-6-1）

構図と標題の相似より【医範提綱内象銅版図】の「第十九図：胃十二指腸膵管總管連屬並蟲様垂」（図3-6-2）を引用していると思われる。

（膵臓）（膵管）（肝管）（総胆管）（十二指腸）は両者とも一致して「膵」「膵管」「肝管」「總管」「十二指腸」と記載されている。

膵管と総胆管が合流して十二指腸乳頭に開口する説明が「膵管（ト）與總管合（メ）為一而入于

十二指腸之管口」と、両者ではほぼ一致している。

〈正図・第7葉・乳糜諸道腸間膜連屬図〉（略称〈正図・7・乳糜腸間膜〉）（図3-7-1）

構図の相似、標題の一致より【医範提綱内象銅版図】の「第二十一図：乳糜諸道腸間膜連屬」（図3-7-2）を引用していると思われる。

（乳ビ槽）（胸管）（腸間膜のリンパ管）（腸間膜以外のリンパ管）は両者で一致して「乳糜囊」「乳糜管」「乳糜脈」「水脈」と記載されている。

腸間膜のリンパ節から起こるリンパ管、胸管の左静脈角における静脈系への合流の説明が両者とも「乳糜脈之起於腺連于囊者」「左鎖骨下静脈脈中乳糜管連處之障膜」で一致している。

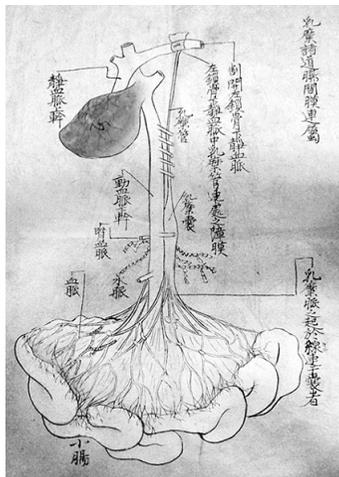


図 3-7-1 解体正図 第7葉

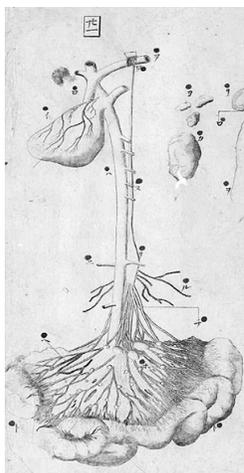


図 3-7-2 医範提綱内象銅版図「乳糜諸道腸間膜連屬」  
※国立国会図書館ウェブサイトから転載

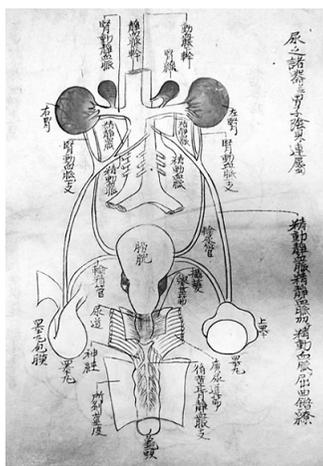


図 3-8-1 解体正図 第8葉

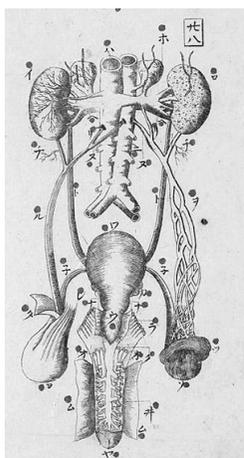


図 3-8-2 医範提綱内象銅版図「尿之諸器並男子陰具連屬」  
※国立国会図書館ウェブサイトから転載

〈正図・第8葉・尿之諸器並男子陰具之ノ連屬図〉  
(略称〈正図・8・男性泌尿生殖器〉) (図 3-8-1)

構図の相似，標題の一致より【医範提綱内象銅版図】の「第二十八図：尿之諸器並男子陰具連屬」(図 3-8-2) を引用していると思われる。

(陰莖背静脈) は『解体正図』では「動血脈」，【医範提綱内象銅版図】【和蘭内景医範提綱】では「循莖背静血脈支」と記載しており，相違が認められる。

(腎臓) (副腎) (膀胱) (尿管) (前立腺) (尿道)

(精管) (精巢上部) (精巢) (精巢動脈) (精巢静脈) (精巢漿膜) (陰莖龟头) (深会陰横筋：推定) (尿生殖隔膜筋膜：推定) は両者で一致して「腎」「腎腺(線)」「膀胱」「輸尿管」「攝護(萼)」「尿道」「輸精管」「上睾丸」「睾丸」「精動血脈」「精静血脈」「睾丸(ノ)包膜」「龟头」「拳莖筋」「廣尿道筋」と記載されている。

以上より，【解体発蒙】より引用されている〈正図・1・脳上面〉と引用元が不明である〈正図・2・小脳裏面〉の2葉中2図以外，殆どの図が【医

表 3-1 解体正図と医範提綱内象銅版図の比較表

解体正図頁	第 1 葉	第 2 葉
原標題及び〈略称〉	鋸截去腦蓋剥腦膜見腦及鎌狀管図〈正図・1・脳〉, 大脳上面図〈正図・1・脳上面〉	去腦蓋出全腦翻之見下面所起十對神經及腦動血脈図〈正図・2・脳下面〉, 剖後腦見裏面図〈正図・2・小脳裏面〉
対応する医範提綱内象銅版図の有無	医範提綱内象銅版図に類似した図あり「第一図：鋸截去腦蓋剥腦膜見腦及鎌狀管」「第二図：鋸截去腦蓋剥腦膜扁截前腦見黑白二髓」	医範提綱内象銅版図に類似した図あり「第三図：去腦蓋出全腦翻之見下面所起十對神經及腦動血脈」
医範提綱内象銅版図との比較(相似点)	○構図 ○標題 ○大脳鎌に対する解剖用語	○構図 ○標題 ○脳底動脈の描写 ○数字による脳神経の表示 ○小脳に対する解剖用語
医範提綱内象銅版図との比較(相違点)	○〈正図・1・脳上面〉は医範提綱内象銅版図に対応する図がない ○大脳に対する解剖用語	○解体正図には脳神経の固有名の記載がない ○〈正図・2・小脳裏面〉は医範提綱内象銅版図に対応する図がない
備考	〈正図・1・脳上面〉に相当する解剖図は構図の相似より, 解体発蒙の「頭腦上面ノ圖」からの引用と思われる	〈正図・2・小脳裏面〉は引用元不明

表 3-2 解体正図と医範提綱内象銅版図の比較表

解体正図頁	第 3 葉	第 4 葉
原標題及び〈略称〉	割開胸腹去網膜見諸器本位図〈正図・3・内臓前面〉	心被心囊圖〈正図・4・心臓〉, 縦割心見心室図〈正図・4・心臓断面〉
対応する医範提綱内象銅版図の有無	医範提綱内象銅版図に類似した図あり「第十六図：割開胸腹去網膜腸腸間膜見諸器本位」「第十八図：胃管胃腸連屬」	医範提綱内象銅版図にほぼ同じ図あり「第十図：心被心囊」「第十一図：脱心囊見心及兩耳」「第十二図：縦割心見心室」
医範提綱内象銅版図との比較(相似点)	○構図 ○標題 ○横隔膜, 気管, 食道, 胃, 空腸, 回腸, 盲腸, 結腸, 直腸, 虫垂, 心臓, 肺, 肝臓, 胆嚢, 脾臓に対する解剖用語	○構図 ○標題 ○左心耳, 右心耳, 左心室, 右心室, 大動脈, 大静脈, 肺動脈, 肺静脈に対する解剖用語
医範提綱内象銅版図との比較(相違点)		○大血管の配置
備考		浜松医科大学付属図書館蔵の解体正図のみ大血管の配置が医範提綱内象銅版図に相似している

表 3-3 解体正図と医範提綱内象銅版図の比較表

解体正図頁	第 5 葉	第 6 葉
原標題及び〈略称〉	喉頭氣管肺連屬之前面図〈正図・5・喉頭氣管肺〉	十二指腸膀胱管總管連屬圖〈正図・6・十二指腸膀胱胆脾〉
対応する医範提綱内象銅版図の有無	医範提綱内象銅版図にほぼ同じ図あり「第八図：喉頭氣管肺連屬之前面並開兩肺之合見氣管支肺血脈入于肺」	医範提綱内象銅版図にほぼ同じ図あり「第十九図：胃十二指腸膀胱管總管連屬並蟲様垂」
医範提綱内象銅版図との比較(相似点)	○構図 ○標題 ○甲状軟骨, 甲状軟骨上角・下角, 喉頭蓋軟骨, 輪状軟骨, 會厭軟骨に付属する腺組織に対する解剖用語	○構図 ○標題 ○十二指腸腸頭部の説明 ○膀胱, 尿管, 肝管, 総胆管, 十二指腸に対する解剖用語
医範提綱内象銅版図との比較(相違点)	○解体正図には医範提綱内象銅版図にある左肺内部の気管支・肺動静脈の描写・記載がない	
備考		

表3-4 解体正図と医範提綱内象銅版図の比較表

解体正図頁	第7葉	第8葉
原標題及び〈略称〉	乳糜諸道腸間膜連屬図〈正図・7・乳糜腸間膜〉	尿之諸器並男子陰具之ノ連屬図〈正図・8・男性泌尿生殖器〉
対応する医範提綱内象銅版図の有無	医範提綱内象銅版図にほぼ同じ図あり「第二十一図：乳糜諸道腸間膜連屬」	医範提綱内象銅版図にほぼ同じ図あり「第二十八図：尿之諸器並男子陰具連屬」
医範提綱内象銅版図との比較(相似点)	○構図 ○標題 ○腸間膜のリンパ節から起こるリンパ管、胸管の左静脈角における静脈系への合流の説明 ○乳ビ槽、胸管、腸間膜のリンパ管、腸間膜以外のリンパ管に対する解剖用語	○構図 ○標題 ○腎臓、副腎、膀胱、尿管、前立腺、尿道、精管、精巢上体、精巢、精巢動脈、精巢静脈、精巢漿膜、陰茎龟头、深会陰横筋(推定)、尿生殖隔膜筋膜(推定)に対する解剖用語
医範提綱内象銅版図との比較(相違点)		○陰茎背静脈に対する解剖用語
備考		

【医範提綱内象銅版図】より引用されていた。さらに使用された解剖用語も56個中54個が【医範提綱内象銅版図】【和蘭内景医範提綱】と一致しており、約96%の一致率により解剖用語もこれらから引用していると考えられた。

最後に『解体正図』の解剖図の順番と、【医範提綱内象銅版図】の解剖図及び【和蘭内景医範提綱】本文の順番を比較検討した結果を述べる。

『解体正図』では、①頭部(中枢神経系)、②胸腹部内臓全体、③胸部(循環器系)、④胸部(呼吸器系)、⑤腹部(消化器系)、⑥腹部(リンパ系)、⑦骨盤部(泌尿生殖器系)と、頭部から順に身体の下部へ向かう流れである。

そして【医範提綱内象銅版図】及び【和蘭内景医範提綱】では、①頭部(中枢神経系)、②胸部

(呼吸器系)、③胸部(循環器系)、④胸腹部内臓全体、⑤腹部(消化器系：消化管)、⑥腹部(リンパ系)、⑦腹部(消化器系：肝胆脾)、⑧骨盤部(泌尿生殖器系)、⑨外皮系、⑩筋系、⑪骨格系、⑫胎児系と、『解体正図』には認められない内容が含まれているが、全体の流れとしては『解体正図』同様に頭部から順に身体の下部へ向かう流れであり、両者は相似している。

### 3. 『(異種)解体正図』と『解体正図』の比較検討結果(図4,表4)

まず製本の構成を比較する。『解体正図』には表題「解體正圖」と記された表紙(図4-1)があり、8葉の解剖図の後に「高倉東湖圖之 天保十一庚子歳十二月十一日 於野州壬生解體 會主 齋藤

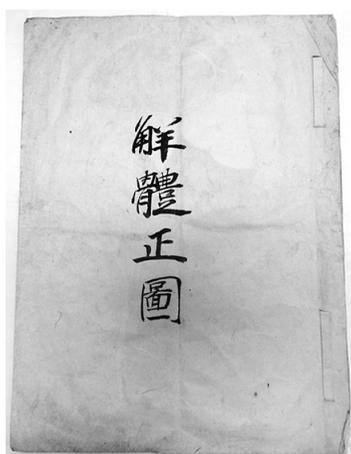


図4-1 解体正図 表紙

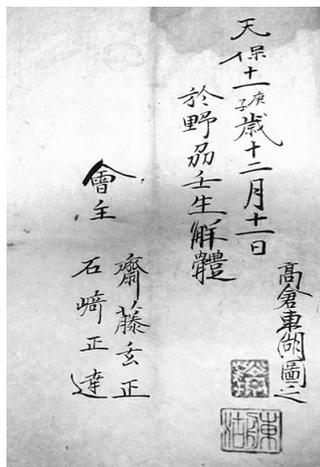


図4-2 解体正図 奥付



図4-3 (異種)解体正図 表紙

玄正 石崎正達」と絵師氏名・解剖の実施年月日・場所・主宰者氏名が記載された奥付(図4-2)があり、何も記載されていない裏表紙で終わる。一方、『(異種) 解体正図』は表紙(図4-3)には右下に「五十嵐氏」と記載されているだけで表題は存在せず、19葉の解剖図の後には奥付も裏表紙も存在しない。つまり、19葉目の解剖図自体が製本上の裏表紙となっている。明らかに製本として『解体正図』は完成されており、『(異種) 解体正図』は不完全と考えられる。

次に両者の解剖図に描かれている臓器・器官を比較する。『解体正図』には描かれていない臓器・器官を描いているのは〈異種・3・耳下腺〉〈異種・3・耳小骨〉〈異種・3・舌骨〉〈異種・4・眼球〉〈異種・9・横隔膜〉〈異種・10・腹筋〉〈異種・13・肝〉〈異種・14・門脈〉〈異種・16・水脈〉の7葉中9図であった。

また描かれている臓器・器官は両者で一致するが、明らかに構図が異なり『解体正図』には対応する解剖図が認められなかったのは〈異種・6・内臓後面〉〈異種・12・胃〉〈異種・12・脾〉〈異種・19・膀胱後面〉〈異種・19・精巣〉〈異種・19・陰茎〉の3葉中の6図であった。

両者で描かれている臓器・器官が一致し、かつ構図も類似していてそれぞれ対応すると考えられる解剖図は〈異種・1・脳〉〈異種・1・脳上面〉と〈正図・1・脳〉〈正図・1・脳上面〉、〈異種・2・脳下面〉〈異種・2・小脳裏面〉と〈正図・2・脳下面〉〈正図・2・小脳裏面〉、〈異種・5・内臓前面〉と〈正図・3・内臓前面〉、〈異種・7・気管肺〉と〈正図・5・喉頭気管肺〉、〈異種・8・心臓〉〈異種・8・心臓断面〉と〈正図・4・心臓〉〈正図・4・心臓断面〉、〈異種・11・胃十二指腸膵胆脾〉と〈正図・6・十二指腸膵胆脾〉、〈異種・15・腸間膜〉と〈正図・7・乳糜腸間膜〉の下半分、〈異種・17・腎脈管〉及び〈異種・18・膀胱前面〉と〈正図・8・男性泌尿生殖器〉であり、『(異種) 解体正図』の9葉中12図と『解体正図』の8葉中11図が類似しているといえる。

しかし両者で引用している解剖書が異なるため詳細に比較すると、〈異種・5・内臓前面〉と〈正

図・3・内臓前面〉、〈異種・11・胃十二指腸膵胆脾〉と〈正図・6・十二指腸膵胆脾〉、〈異種・15・腸間膜〉と〈正図・7・乳糜腸間膜〉の下半分、〈異種・17・腎脈管〉及び〈異種・18・膀胱前面〉と〈正図・8・男性泌尿生殖器〉の5葉中5図の『(異種) 解体正図』と4葉中4図の『解体正図』の解剖図は類似しているが互いに模写・模倣しているとは考え難い。

全体の構図からほぼ同一の解剖図と考えられたのは、〈異種・1・脳〉〈異種・1・脳上面〉と〈正図・1・脳〉〈正図・1・脳上面〉、〈異種・2・脳下面〉〈異種・2・小脳裏面〉と〈正図・2・脳下面〉〈正図・2・小脳裏面〉、〈異種・7・気管肺〉と〈正図・5・喉頭気管肺〉、〈異種・8・心臓〉〈異種・8・心臓断面〉と〈正図・4・心臓〉〈正図・4・心臓断面〉の4葉中7図であった。

〈異種・1・脳〉〈異種・1・脳上面〉と〈正図・1・脳〉〈正図・1・脳上面〉においては、(大脳半球)(大脳鎌)に対する解剖用語の記載の有無といった相違があるが、〈異種・1・脳〉及び〈正図・1・脳〉は【医範提綱内象銅版図】より、〈異種・1・脳上面〉及び〈正図・1・脳上面〉は【解体発蒙】より引用しており、引用元が一致している。この二つの図の大きさには差があるものの配置が一致しており、互いに模写及び模倣した可能性が高いと考えられる。

〈異種・2・脳下面〉〈異種・2・小脳裏面〉と〈正図・2・脳下面〉〈正図・2・小脳裏面〉においては、〈異種・2・脳下面〉及び〈正図・2・脳下面〉はそれぞれ引用元が【解体発蒙】と【医範提綱内象銅版図】と異なるが、両者とも引用元が不明である〈異種・2・小脳裏面〉及び〈正図・2・小脳裏面〉の構図と標題が極めて類似しており、二つの図の配置もほぼ一致していることから、互いに模写及び模倣した可能性が高いと考えられる。

〈異種・7・気管肺〉と〈正図・5・喉頭気管肺〉においては、『(異種) 解体正図』には描かれている〈異種・7・喉頭軟骨〉が『解体正図』には存在しないという相違があるが、〈異種・7・気管肺〉及び〈正図・5・喉頭気管肺〉は両者とも【医

表4-1 (異種) 解体正図と解体正図の比較表

(異種) 解体正図頁	表紙	第1葉	第2葉
標題〈略称〉		〈異種・1・脳〉, 〈異種・1・脳上面〉	〈異種・2・脳下面〉, 〈異種・2・小脳裏面〉
対応する解体正図の有無〈略称〉		解体正図にはほぼ同じ図あり: 解体正図第1葉〈正図・1・脳〉, 〈正図・1・脳上面〉	解体正図にはほぼ同じ図あり: 解体正図第2葉〈正図・2・脳下面〉, 〈正図・2・小脳裏面〉
解体正図との比較(相似点)		○引用元 ○2図の配置 ○大脳に対する解剖用語	○引用元不明の〈異種・2・小脳裏面〉と〈正図・2・小脳裏面〉の構図と標題 ○2図の配置
解体正図との比較(相違点)	○表題がない ○右下に「五十嵐氏」	○解体正図にある「鎌状管(大脳鎌)」の記載が(異種)解体正図にはない ○解体正図にはない大脳半球を示す「半規形」の記載が(異種)解体正図にはある	○〈異種・2・脳下面〉及び〈正図・2・脳下面〉の引用元 ○小脳, 10対の脳神経に対する解剖用語
備考		○〈異種・1・脳〉及び〈正図・1・脳〉は医範提綱内象銅版図からの引用 ○〈異種・1・脳上面〉及び〈正図・1・脳上面〉は解体発蒙からの引用	○〈異種・2・小脳裏面〉及び〈正図・2・小脳裏面〉は引用元不明 ○〈異種・2・脳下面〉は解体発蒙から引用し, 〈正図・2・脳下面〉は医範提綱内象銅版図からの引用

表4-2 (異種) 解体正図と解体正図の比較表

(異種) 解体正図頁	第3葉	第4葉	第5葉
標題〈略称〉	〈異種・3・耳下腺〉, 〈異種・3・耳小骨〉, 〈異種・3・舌骨〉	〈異種・4・眼球〉	〈異種・5・内臓前面〉
対応する解体正図の有無〈略称〉	解体正図に対応する図なし	解体正図に対応する図なし	解体正図に類似した図あり: 解体正図第3葉〈正図・3・内臓前面〉
解体正図との比較(相似点)			○構図 ○横隔膜, 胃, 十二指腸, 虫垂, 盲腸, 直腸, 脾臓, 胆嚢, 肝臓, 肺, 気管, 心臓に対する解剖用語
解体正図との比較(相違点)			○(異種)解体正図では内臓のみ, 解体正図では胸郭や腹壁を中心から左右に開くように描かれている ○食道, 小腸, 大腸に対する解剖用語 ○引用元
備考	(○重訂解体新書銅版全図からの引用と思われる)	○引用元不明	○(異種)解体正図は解体発蒙からの引用 ○解体正図は医範提綱内象銅版図からの引用

【医範提綱内象銅版図】より引用している。ただし、完全な引用ではなく、【医範提綱内象銅版図】では左肺の内部構造が描かれているが、『(異種)解体正図』及び『解体正図』ではそれが省略されている。省略の仕方が一致することより、互いに模写及び模倣した可能性が高いと考えられる。

〈異種・8・心臓〉〈異種・8・心臓断面〉と〈正図・4・心臓〉〈正図・4・心臓断面〉においては、両者とも二つの図を【医範提綱内象銅版図】より引用している。二つの図の配置が一致していることから互いに模写及び模倣した可能性が高いと考えられる。しかしながら先述したように、大血管の配置に関しては『解体正図』では実際の解剖所

見に基づいた描写の可能性が強く、『(異種)解体正図』よりも独自性が認められる。

なお、「両室筋條」の記載が指す部位は、『(異種)解体正図』では心室内の肉柱、『解体正図』では心室中隔であり、『(異種)解体正図』の方が正確である。

以上より、『(異種)解体正図』と『解体正図』で互いに模写及び模倣した可能性が考えられる4葉中7図の解剖図が同定された。

次に使用された解剖用語を比較する。『(異種)解体正図』と『解体正図』で一致した解剖用語は(大脳)(胃)(十二指腸)(虫垂)(盲腸)(直腸)(横隔膜)(甲状軟骨)(喉頭蓋軟骨)(輪状軟骨)(肺)

表 4-3 (異種) 解体正図と解体正図の比較表

(異種) 解体正図頁	第 6 葉	第 7 葉	第 8 葉
標題〈略称〉	〈異種・6・内臓後面〉	〈異種・7・気管肺〉, 〈異種・7・喉頭軟骨〉	〈異種・8・心臓〉, 〈異種・8・心臓断面〉
対応する解体正図の有無〈略称〉	解体正図に対応する図はなし	解体正図にほぼ同じ図あり：解体正図第 5 葉〈正図・5・喉頭気管肺〉	解体正図にほぼ同じ図あり：解体正図第 4 葉〈正図・4・心臓〉, 〈正図・4・心臓断面〉
解体正図との比較(相似点)		○引用元 ○左肺内部の省略 ○甲状軟骨, 喉頭蓋軟骨, 輪状軟骨に対する解剖用語	○引用元 ○2 図の配置 ○左心耳, 右心耳, 左心室, 右心室, 大動脈, 大静脈, 肺動脈, 肺静脈に対する解剖用語
解体正図との比較(相違点)		○(異種) 解体正図には解体正図にはない〈異種・7・喉頭軟骨〉がある ○喉頭蓋の腺に対する解剖用語	○「両室筋條」の記載が指す部位は, (異種) 解体正図では心室内の肉柱, 解体正図では心室中隔である
備考	○解体発蒙からの引用	○両者とも医範提綱内象銅版図からの引用	○両者とも医範提綱内象銅版図からの引用

表 4-4 (異種) 解体正図と解体正図の比較表

(異種) 解体正図頁	第 9 葉	第 10 葉	第 11 葉
標題〈略称〉	〈異種・9・横隔膜〉	〈異種・10・腹筋〉	〈異種・11・胃十二指腸脾胆脾〉
対応する解体正図の有無〈略称〉	解体正図に対応する図はなし	解体正図に対応する図はなし	解体正図に類似した図あり：解体正図第 6 葉〈正図・6・十二指腸脾胆脾〉
解体正図との比較(相似点)			○構図
解体正図との比較(相違点)			○脾臓に対する解剖用語 ○引用元
備考	○解体発蒙からの引用	○引用元不明	○(異種) 解体正図は解体発蒙からの引用 ○解体正図は医範提綱内象銅版図からの引用

表 4-5 (異種) 解体正図と解体正図の比較表

(異種) 解体正図頁	第 12 葉	第 13 葉	第 14 葉
標題〈略称〉	〈異種・12・胃〉, 〈異種・12・脾〉	〈異種・13・肝〉	〈異種・14・門脈〉
対応する解体正図の有無〈略称〉	解体正図に対応する図はなし	解体正図に対応する図はなし	解体正図に対応する図はなし
解体正図との比較(相似点)			
解体正図との比較(相違点)			
備考	○解体発蒙からの引用	○解体発蒙からの引用	○解体発蒙からの引用

(気管) (心臓) (左心耳) (右心耳) (左心室) (右心室) (大動脈) (大静脈) (肺動脈) (肺静脈) (脾臓) (胆嚢) (肝臓) (腸間膜以外のリンパ管) (腎臓) (膀胱) (尿管) (精巣動脈) (精巣静脈) (前立腺) (精管) (精巣) (陰茎龟头) に対する解剖用語である「本脳(本脳)」 「胃」 「十二指腸」 「蟲様垂」 「盲腸」 「直腸」 「横膈(膈膜)」 「甲状軟骨」 「會厭軟骨」 「環状軟骨」 「肺」 「気管」 「心」 「左耳」 「右耳」 「左室」 「右室」 「動血脈上幹」 「静血脈上幹」 「肺動血

脈」 「肺静血脈」 「脾」 「膽」 「肝」 「水脈」 「腎」 「膀胱」 「輸尿管」 「精動血脈」 「精静血脈」 「攝護(攝婬)」 「輸精管」 「睪丸」 「龟头」 の 34 個であった。一方, (小脳) (食道) (小腸) (大腸) (喉頭蓋軟骨に付属する腺) (脾臓) (腸間膜のリンパ管) (乳ビ槽) (副腎) (尿道) (精巣上体) (精巣漿膜) に対する 12 個の解剖用語は『(異種) 解体正図』では「小脳」 「食道」 「薄腸」 「厚腸」 「會厭軟骨濾胞」 「臍」 「漚脈」 「乳糜槽」 「側腎」 「尿管」 「帽罩

表4-6 (異種) 解体正図と解体正図の比較表

(異種) 解体正図頁	第15葉	第16葉	第17葉
標題〈略称〉	〈異種・15・腸間膜〉	〈異種・16・水脈〉	〈異種・17・腎脈管〉
対応する解体正図の有無〈略称〉	解体正図に類似した図(下半分)あり: 解体正図第7葉〈正図・7・乳糜腸間膜〉下半分	解体正図に対応する図はなし	解体正図に類似した図(上半分)あり: 解体正図第8葉〈正図・8・男性泌尿生殖器〉上半分
解体正図との比較(相似点)	○解体正図の下半分部分との構図 ○描写された臓器・器官が一部一致	○腸間膜のリンパ管に対する解剖用語	○解体正図の上半分部分との構図 ○描写された臓器・器官が一部一致 ○腎臓, 尿管, 精巣動脈, 精巣静脈に対する解剖用語
解体正図との比較(相違点)	○腸間膜のリンパ管, 乳糜槽に対する解剖用語 ○引用元		○(異種) 解体正図の精巣の動静脈の描写は簡潔で, 解体正図にある精巣動静脈を一括して被う被膜の描写・記載がない ○副腎に対する解剖用語 ○引用元
備考	○(異種) 解体正図は解体発蒙からの引用 ○解体正図は医範提綱内象銅版図からの引用	○解体発蒙からの引用	○(異種) 解体正図は解体発蒙からの引用 ○解体正図は医範提綱内象銅版図からの引用

表4-7 (異種) 解体正図と解体正図の比較表

(異種) 解体正図頁	第18葉	第19葉
標題〈略称〉	〈異種・18・膀胱前面〉	〈異種・19・膀胱後面〉, 〈異種・19・精巣〉, 〈異種・19・陰茎〉
対応する解体正図の有無〈略称〉	解体正図に類似した図(下半分)あり: 解体正図第8葉〈正図・8・男性泌尿生殖器〉下半分の一部分	解体正図に相当する図はなし
解体正図との比較(相似点)	○解体正図の下半分部分との構図 ○描写された臓器・器官が一部一致 ○膀胱, 前立腺に対する解剖用語	○精管, 精巣, 陰茎龟头に対する解剖用語
解体正図との比較(相違点)	○解体正図では描かれていない左右の「精囊」を(異種) 解体正図では描写・記載している ○尿道に対する解剖用語 ○引用元	○精巣上部, 精巣漿膜に対する解剖用語 ○解体正図にある奥付が(異種) 解体正図にはなく, 19枚目の図自体が裏表紙となっている
備考	○(異種) 解体正図は解体発蒙からの引用 ○解体正図は医範提綱内象銅版図からの引用	○〈異種・19・膀胱後面〉は解体発蒙からの引用 ○〈異種・19・精巣〉, 〈異種・19・陰茎〉は引用元不明

「辜莖衣」と記載されているが、『解体正図』では「後腦」「胃管」「空腸・廻腸」「結腸」「會厭軟骨腺」「睪」「乳糜脈」「乳糜囊」「腎腺」「尿道」「上辜」「辜丸包膜」と記載されており、両者で使用された解剖用語に相違が認められた。

『(異種) 解体正図』と『解体正図』の解剖用語において46語中12語の割合で相違が認められる。約26%の相違率で目立つことより、『(異種) 解体正図』の解剖用語は【医範提綱内象銅版図】及び【和蘭内景医範提綱】には基づいていないと考えられる。

最後に『(異種) 解体正図』と『解体正図』の解剖図の順番を比較検討した結果を述べる。解剖図の葉数が異なるために『(異種) 解体正図』に

は『解体正図』では認められない内容が含まれているが、全体の流れとしては両者とも頭部から順に身体の下部へ向かう流れであり、両者は相似している。

#### 4. 『(異種) 解体正図』の解剖用語の引用元の検索結果(表5)

『(異種) 解体正図』の解剖用語がどの既刊解剖書に基づいているのか検索するにあたり、(睪臓)を表す「睪」と(分泌腺及びリンパ節)を表す「濾胞」に注目した。(睪臓)(分泌腺及びリンパ節)は安永3年(1774)に刊行された【解体新書】では「大キリイル(大機里爾)」「キリイル(機里爾)」と表現され、寛政10年(1798)に脱稿された【重

表 5-1 解剖用語の比較表

現在の解剖用語	(異種)解体正図	重訂解体新書 寛政10年(1798)	解体発蒙 文化10年(1813)	解体正図 天保11年(1840)	和蘭内景医範提綱 文化2年(1805) 医範提綱内象銅版図 文化5年(1808)
大脳	本脳	本脳	大脳	本脳	前脳
大脳半球	半規形	半規形	半月形	記載なし	記載なし
大脳鎌	記載なし	(矢縫會脈) 鎌様管	記載なし	鎌状管	鎌状管
第一脳神経 嗅神経	第一對眼神経	第一對眼神経	一嗅液道	脳神経十對一ヨリ至十	第一對眼神経
第二脳神経 視神経	第二對眼神経	第二對眼神経	二視液道		第二對視神経
第三脳神経 動眼神経	第三對旋眼神経	第三對旋眼神経	三動眼液道		第三對動眼神経
第四脳神経 滑車神経	第四對輻車神経	第四對輻車神経	四運目液道		第四對運車神経
第五脳神経 三叉神経	第五對分派神経	第五對分派神経	五眼耳鼻口舌及頭面諸支液道		第五對分布神経
第六脳神経 外転神経	第六對外旋神経	第六對外旋神経	六架目液道		第六對索引神経
第七脳神経 顔面神経	第七對聽神経	第七對聽神経	七聽液道		第七對聽神経
第八脳神経 内耳神経	第八對走散(神)経	第八對走散神経	八心肺胃及經絡液道		第八對蔓延神経
第九脳神経 舌咽神経	第九對舌神経	第九對舌神経	九味液道		第九對味神経
第十脳神経 迷走神経	第十(一)對項神経	第十一對項神経	十頸液道		第十對項神経
延髄	延髄	延髄	延髄	記載なし	項髄
脊髄	脊髄	脊髄	脊髄	記載なし	脊髄
小脳	小脳	小脳	小脳	後脳	後脳
耳下腺	耳根濾胞	耳根濾胞	記載なし	記載なし	記載なし
耳下腺管	速貼那唾管	速貼那唾管	記載なし	記載なし	記載なし
該当用語なし	圓骨	圓骨	記載なし	記載なし	記載なし
砧骨	鑢骨	鑢骨	記載なし	記載なし	記載なし
鐙骨	鐙骨	鐙骨	記載なし	記載なし	記載なし
槌骨	鎚骨	鎚骨	記載なし	記載なし	記載なし
舌骨	舌骨	舌骨	舌骨	記載なし	記載なし
該当用語なし	第一素膜	素膜	記載なし	記載なし	記載なし
強膜(鞏膜)	第二鞏膜	鞏膜	記載なし	記載なし	記載なし
脈絡膜	第三脈様膜	脈様膜	記載なし	記載なし	記載なし
角膜	透明角膜	透明角膜	記載なし	記載なし	記載なし
虹彩	虹彩	虹彩	記載なし	記載なし	記載なし
硝子体	硝子様液	硝子様液	記載なし	記載なし	記載なし
眼房水(水様体)	水様液	水様液	記載なし	記載なし	記載なし
水晶体	水晶様液	水晶様液	記載なし	記載なし	記載なし
網膜	網膜	網膜	記載なし	記載なし	記載なし
毛様体	葡萄様膜	葡萄様膜	記載なし	記載なし	記載なし
横隔膜	横膈	横膈	(横)膈膜	横膈膜	横膈膜
食道	食道	食道	胃管	胃管	胃管
胃	胃	胃	胃	胃	胃
噴門	胃上口	左口・上口	胃上口	記載なし	上口
幽門	胃下口	下口	胃下口	記載なし	下口
小腸	薄腸	薄腸(空腸, 廻腸)	小腸(薄腸, 和腸, 廻腸)	空腸, 廻腸	小腸(空腸, 廻腸)
大腸	厚腸	厚腸(盲腸, 結腸, 直腸)	大腸(厚腸)	盲腸, 結腸, 直腸	大腸(盲腸, 結腸, 直腸)
十二指腸	十二指腸	十二指腸	十二指腸(下胃)	十二指腸	十二指腸
虫垂(虫様突起)	蟲様垂	蟲様垂	蟲腸	蟲様垂	蟲様垂
盲腸	盲腸	盲腸	闌門	盲腸	盲腸
直腸	直腸	直腸	直腸	直腸	直腸
腸間膜	腸隔	腸隔	下膈膜(小腸膜原)	記載なし	腸間膜
肛門	肛門	肛門	肛門	記載なし	肛門
甲状軟骨	甲状軟骨	甲状軟骨	記載なし	甲状軟骨	甲状軟骨
甲状軟骨上角・下角	記載なし	記載なし	記載なし	甲状軟骨上・ 下端兩隅突起	甲状軟骨上・ 下端兩隅突起
喉頭蓋軟骨(会厭軟骨)	會厭軟骨	會厭(軟骨)	會厭	會厭軟骨	會厭軟骨
輪状軟骨	環状軟骨	鑢状軟骨	記載なし	環状軟骨	環状軟骨
披裂軟骨	披裂軟骨	披裂軟骨	披裂	記載なし	披裂軟骨
該当用語なし	會厭軟骨濾胞	會厭(に付属する)濾胞	記載なし	會厭軟骨線	會厭軟骨ノ腺

表5-2 解剖用語の比較表

現在の解剖用語	(異種) 解体正図	重訂解体新書 寛政10年(1798)	解体発蒙 文化10年(1813)	解体正図 天保11年(1840)	和蘭内景医範提綱 文化2年(1805) 医範提綱内象銅版図 文化5年(1808)
肺	肺	肺	肺	肺	肺
気管	氣管	氣管	气管(气道)	氣管	氣管
心臓	心	心	心	心	心
冠状動脈(推定)	血絡彌蔓之	帽心動脈	心之包絡?	記載なし	心血絡彌蔓之
左心耳	左耳	心左耳	左耳	左耳	左耳
右心耳	右耳	心右耳	右耳	右耳	右耳
左心室	左室	左室	左室	左室	左室
右心室	右室	右室	右室	右室	右室
(上行) 大動脈	動血脈大幹	動血脈	經脈大幹	動血脈上幹	動血脈
(上) 大静脈	静血脈大幹	静血脈	絡脈大幹	静血脈上幹	静血脈
肺動脈	肺動血脈	肺動血脈	肺經脈	肺動血脈	肺動血脈
肺静脈	肺静血脈	肺静血脈	肺絡脈	肺静血脈	肺静血脈
外腹斜筋	斜下筋	斜外腹筋	記載なし	記載なし	記載なし
腹直筋	直筋	直腹筋	記載なし	記載なし	記載なし
白線	白條	白條	記載なし	記載なし	記載なし
臍	臍	臍	臍	記載なし	臍
脾臓	脾	脾	脾	脾	脾
脛臓	脛	脛	中脛府	脛	脛
胆嚢	膽	膽	膽(嚢)	膽	膽
肝臓	肝	肝	肝	肝	肝
脘管	記載なし	濾胞林總管	膜管	脘管	脘管
肝管	記載なし	肝管	記載なし	肝管	肝管
総胆管	記載なし	總管(膽管)	膽管	總管	總管
門脈	門脈	門脈	門脈	記載なし	門脈
左結腸静脈	内行腸脈	内行腸脈	直腸之復脈	記載なし	記載なし
下腸間膜静脈	腸網左脈	腸網左脈	盲膜之左復脈	記載なし	記載なし
脘静脈	脛脈	脛脈	中脛之復脈	記載なし	記載なし
左胃大網静脈	胃腸網左脈	胃腸網左脈	胃及盲膜之左復脈	記載なし	記載なし
短胃静脈	短脈	短脈	脾之復脈	記載なし	記載なし
左胃静脈	胃左脈	胃左脈	胃之左復脈	記載なし	記載なし
胆嚢静脈	膽脈	膽脈	膽之復脈	記載なし	記載なし
門脈幹	大幹	幹	大幹	記載なし	幹
空回腸静脈・回結腸静脈・ 右結腸静脈・中結腸静脈・ S状結腸静脈・上直腸静脈	腸隔脈	腸隔脈	所起始之支別出 於腸及下膈膜	記載なし	記載なし
脘十二指腸静脈	十二指腸脈	十二指腸脈	幽門之復脈	記載なし	記載なし
右胃大網静脈	胃腸網右脈	胃腸網右脈	胃及盲膜之右復脈	記載なし	記載なし
上腸間膜静脈	腸網右脈	腸網右脈	盲膜之右復脈	記載なし	記載なし
乳ビ槽	乳糜槽	乳糜槽	下膈府	乳糜囊	乳糜囊
胸管	記載なし	乳糜管	上膈府	乳糜管	乳糜管
腸間膜のリンパ管	湮脈	湮脈	下膈細道	乳糜脈	乳糜脈
腸間膜以外のリンパ管	水脈	水脈	水道	水脈	水脈
腎臓	腎	腎	大腎	腎	腎
副腎	側腎	側腎	小腎	腎線	腎腺(副腎)
膀胱	膀胱	膀胱	膀胱	膀胱	膀胱
尿管	輸尿管	輸尿管	尿道	輸尿管	輸尿管
精巣動脈	精動血脈	精動血脈	胞經(精經)	精動血脈	精動血脈
精巣静脈	精静血脈	精静血脈	胞絡(精絡)	精静血脈	精静血脈
精囊	精囊	精囊	精室	記載なし	精囊
前立腺(接護腺)	攝護	攝護	胞腫	攝護	攝護
尿道	尿管	尿管	小水管	尿道	尿道
精管	輸精管	輸精管	畢系	輸精管	輸精管
精巣上体	帽辜	帽辜	記載なし	上辜	上辜
精巣	辜丸	辜丸	辜	辜丸	辜丸
精巣漿膜	辜衣	辜衣	外包ノ膜囊	辜丸包膜	辜丸ノ包膜
白膜	白衣	白衣	記載なし	記載なし	記載なし
陰茎龟头	龟头	莖頭	龟头	龟头	龟头
陰茎海綿体	海綿様本質	海綿様	記載なし	記載なし	記載なし
陰茎背静脈	記載なし	男莖奇脈	記載なし	循莖背静血脈支	動血脈
深会陰横筋(推定)	記載なし	拳筋	記載なし	拳莖筋	拳莖筋
上尿管隔膜筋(推定)	記載なし	記載なし	記載なし	廣尿道筋	廣尿道筋

訂解体新書』では「朧」「濾胞」と表現された。そして文化2年(1805)に刊行された【和蘭内景医範提綱】で初めて「腭」及び「腺」という解剖用語が誕生している。これらのことより『(異種) 解体正図』と【重訂解体新書】は両者とも(腭臓)と(分泌腺及びリンパ腺)に対する解剖用語が一致していることが判明した。

そこで『(異種) 解体正図』と【重訂解体新書】<sup>19)</sup>の解剖用語を比較検討した結果、『(異種) 解体正図』に記載されている殆どの解剖用語である「本脳(腦)」「半規形」「第一對嗅神經」「第二對鑿神經」「第三對旋眼神經」「第四對輻車神經」「第五對分派神經」「第六對外旋神經」「第七對聽神經」「第八對走散(神)經」「第九對舌神經」「第十(一)對項神經」「延髓」「脊髓」「小腦(腦)」「耳根濾胞」「速貼那唾管」「鬪骨」「鑿骨」「鐙骨」「鏡骨」「舌骨」「(第一)素膜」「(第二)鞏膜」「(第三)脈様膜」「透明角膜」「虹彩」「硝子様液」「水様液」「水晶様液」「網膜」「葡萄様膜」「横膈」「食道」「胃」「胃上口」「胃下口」「薄腸」「厚腸」「十二指腸」「蟲様垂」「盲腸」「直腸」「腸隔」「肛門」「甲状軟骨」「會厭(軟骨)」「環(鑲)状軟骨」「披裂軟骨」「會厭(軟骨に付属する)濾胞」「肺」「氣管」「心」「左耳」「右耳」「左室」「右室」「動血脈(大幹)」「静血脈(大幹)」「肺動血脈」「肺静血脈」「白條」「臍」「脾」「朧」「膽」「肝」「門脈」「内行孺脈」「腸網

左脈」「朧脈」「胃腸網左脈」「短脈」「胃左脈」「膽脈」「(門脈大)幹」「腸隔脈」「十二指腸脈」「胃腸網右脈」「腸網右脈」「乳糜槽」「湏脈」「水脈」「腎」「側腎」「膀胱」「輸尿管」「精動血脈」「精静血脈」「精囊」「攝護」「尿管」「輸精管」「帽峯」「辜丸」「辜莢衣」「白衣」「海綿様(本質)」の98語において両者は一致しており、相違が認められたのは「帽心動脈」と「血絡彌蔓之」,「斜外腹筋」と「斜下筋」,「直腹筋」と「直筋」,「莖頭」と「龜頭」の4語であり僅かである。

『(異種) 解体正図』と【重訂解体新書】の解剖用語において、102語の内98語の一致の割合は約96%であり、極めて高いと考えられる。

これにより、『(異種) 解体正図』の解剖用語は【重訂解体新書】に基づいていることが判明した。

### 5. 『(異種) 解体正図』と【重訂解体新書銅版全図】の比較検討結果(図5)

『(異種) 解体正図』は解剖図の大部分を【解体発蒙】より、解剖用語の殆どを【重訂解体新書】より引用していることが判明したことを踏まえて、引用元が不明であった『(異種) 解体正図』の解剖図の検索結果と両者の解剖図の順番について比較検討した結果を述べる。

引用元が不明な〈異種・2・小脳裏面〉〈異種・3・耳下腺〉〈異種・3・耳小骨〉〈異種・3・舌骨〉



図5-1 (異種) 解体正図 第3葉



図5-2 重訂解体新書銅版全図「諸骨區別篇圖」「口篇圖」

※国立国会図書館ウェブサイトから転載

〈異種・4・眼球〉〈異種・10・腹筋〉〈異種・19・精巢〉〈異種・19・陰莖〉の5葉中8図の内、【重訂解体新書銅版全図】<sup>20)</sup>と類似性が認められたのは〈異種・3・耳下腺〉〈異種・3・耳小骨〉〈異種・3・舌骨〉(図5-1)の1葉中3図のみである。

【重訂解体新書銅版全図】の「諸骨區別篇圖」には頭蓋骨・歯牙・舌骨・耳小骨が描写されており(図5-2)、舌骨と耳小骨の描写及び配置が若干〈異種・3・耳小骨〉〈異種・3・舌骨〉と類似していると思われる。また、【重訂解体新書銅版全図】の「口篇圖」には下から見た硬口蓋・左側面より見た耳下腺が描写されており(図5-2)、左側面からの視点やゾンデによる耳下腺管の明示が〈異種・3・耳下腺〉と類似していると思われる。

しかしながら、残り4葉中5図に関しては【重訂解体新書銅版全図】との相似性及び類似性が認められず、残念ながら引用元は不明のままであった。

また解剖図の順番については、【重訂解体新書銅版全図】では①外皮系、②骨格系、③頭頸部(外皮系)、④口部、⑤頭部(中枢神経系)、⑥頭部(感覚器系)、⑦胸部(胸郭)、⑧胸部(呼吸器系)、⑨胸部(循環器系)、⑩腹部(脈管系)、⑪腹部(消化器系:消化管)、⑫腹部(リンパ系)、⑬腹部(消化器系:肝胆膵)、⑭骨盤部(泌尿生殖器系)、⑮胎児系、⑯筋系であり、『(異種)解体正図』には認められない内容が含まれているが、全体の流れとしては『(異種)解体正図』同様に頭部から順に身体の下部へ向かう流れであり、両者は相似している。

まとめると、【重訂解体新書銅版全図】【重訂解体新書】及び【医範提綱内象銅版図】【和蘭内景医範提綱】、『(異種)解体正図』及び『解体正図』の解剖図や本文の順番は総じて頭部から身体の下部へと向かい、【解体発蒙】のみが異質であることが判明した。

## 【考 察】

『(異種)解体正図』と『解体正図』の関係性、『(異種)解体正図』の制作者及び制作時期とその役割について

『(異種)解体正図』と『解体正図』を比較検討した結果、互いに模写及び模倣した可能性が考えられる4葉中7図の解剖図が同定された。ここで問題となるのは、どちらが先に制作されたのかという点である。

『(異種)解体正図』の制作者は表紙にある「五十嵐氏」の記載より、五十嵐家の人物であると考えられる。また『解体正図』との類似性からこの二つの解剖図の制作時期はさほどずれていないと推定され、壬生藩での解剖が実施された天保11年(1840)12月前後と考えられる。初代五十嵐順智は天保15年(1844)に死去しており、解剖開催時は晩年にあたる。一方、二代目順智(当時の五十嵐桂輔)は解剖開催時には数え年45歳の壮年であり、解剖の翌々年天保13年(1842)に壬生藩医となり、さらに2年後の天保15年(1844)以降には二代目を継承しており、医業に充実した時期であったと推察される。こうしたことから壬生藩医となる直前の二代目順智が制作者として最も可能性が高いと考えられる。

『(異種)解体正図』には表題及び奥付がないことや裏表紙がそのまま19葉目の解剖図である製本としての不完全性より、公式な解剖図ではなく、制作の主なる目的は制作者の個人的な覚書かつ解剖学習用ノートであったと思われる。

制作時期として以下の3通りを仮定した。

- ①解剖以前に、【解体発蒙】【医範提綱内象銅版図】【重訂解体新書】その他の解剖書・図を参考にして作成された場合。
- ②解剖直後に、個人的な解剖記録として【解体発蒙】【医範提綱内象銅版図】【重訂解体新書】その他の解剖書・図を参考にして作成された場合。
- ③解剖後に公式な解剖記録である『解体正図』が制作された後、『解体正図』および【解体発蒙】【医範提綱内象銅版図】【重訂解体新書】その他

の解剖書・図を参考にして作成された場合。

まず②の解剖記録として制作された場合であるが、いくら個人的な目的であっても、記録として制作するにあたっては、解剖に関する諸情報も記録する必要がある筈である。解剖実施日、場所や解剖の主宰者の氏名等を記載しないと極めて考え難い。よって、解剖直後の解剖記録としての制作は成立し難いと思われる。

次に③の『解体正図』を参考にして制作した場合を考察するには、使用された解剖用語の相違に注目すべきである。『(異種) 解体正図』では【重訂解体新書】に、『解体正図』では【和蘭内景医範提綱】に基づいた解剖用語が使用されている。【重訂解体新書】は文政9年(1826)の刊行であるが、実際には寛政10年(1798)に脱稿されている。そして文化2年(1805)に刊行された【和蘭内景医範提綱】本文中には「此書ニ載ル諸器諸液ノ名稱並ニ新製字等皆重訂解體新書ト参考出入シテ改譯シ醫範ニ載ル所ナリ 故ニ其名義ハ醫範ニ就テ考フベシ」と【重訂解体新書】の解剖用語を参考にした上で、同様の用語や新規の用語を使用している旨が明記されている。つまり、【重訂解体新書】の解剖用語は【和蘭内景医範提綱】の用語よりも古いと、読者が捉えることが可能である。『(異種) 解体正図』の制作者が『解体正図』を参考にした場合、華々しい公式の解剖図においてより新しい解剖用語が使用されているにも関わらず、あえて古い用語を採用することに疑問を覚える。ましてや実際に解剖を見学し、新しい知見を入手した後である。単に慣れ親しんだ古い解剖用語を採用した可能性も否定できないが、解剖用語の相違から『(異種) 解体正図』の方が『解体正図』よりも先に制作されていた可能性が高いと考えられた。

解剖記録としての制作が否定的であり、『解体正図』より前に『(異種) 解体正図』が制作された可能性が高いことより、自ずと①の解剖以前に【解体発蒙】【医範提綱内象銅版図】【重訂解体新書】そのほかの解剖書を参考にして作成されたケースと考えられる。『(異種) 解体正図』の制作者は解剖図の一部において【医範提綱内象銅版

図】も参考しているが、解剖用語に関しては【重訂解体新書】に重きを置いた様子である。また漢蘭折中派の医師の著作である【解体発蒙】の解剖図を多く引用していることより、齋藤玄昌のように西洋医学の最先端を担っていたというよりも、やや漢方よりの医学を専門にしていた可能性が考えられる。このことは当初古方派を学び、後に西洋医学に興味を示した二代目順智の経歴にあてはまると考えられる。

さらに、両者における模写及び模倣の可能性より『(異種) 解体正図』自体が公式な解剖記録である『解体正図』の参考元となった可能性が考えられる。齋藤玄昌と石崎正達(高倉東湖と共に解剖記録を制作するにあたって、初代順智を補佐していたと思われる藩医就任直前の二代目順智(当時の五十嵐桂輔)が解剖前の予習ノートとして以前から個人的に制作していた『(異種) 解体正図』を参考図として、彼らに情報提供したのではないだろうか。五十嵐桂輔の名前が『解体正図』に記載されなかったのは、当時はまだ壬生藩医就任及び二代目襲名前であり、他の壬生藩医や初代に対する遠慮があったことが原因と推測される。

最終的に齋藤玄昌と石崎正達の2名は『解体正図』制作にあたり、『(異種) 解体正図』のみならず【医範提綱内象銅版図】も大いに参考にしていく。この結果、全解剖図の内〈正図・1・脳〉〈正図・1・脳上面〉〈正図・2・小脳裏面〉〈正図・4・心臓〉〈正図・4・心臓断面〉〈正図・5・喉頭気管肺〉の4葉中6図については主に『(異種) 解体正図』を模写もしくは模倣し、〈正図・2・脳下面〉〈正図・3・内臓前面〉〈正図・6・十二指腸膵胆脾〉〈正図・7・乳糜腸間膜〉〈正図・8・男性泌尿生殖器〉の5葉中5図については【医範提綱内象銅版図】から引用し、解剖用語に関しては【和蘭内景医範提綱】に基づいたより新しい用語を採用したと推定される。

## 【結 論】

①『(異種) 解体正図』の解剖図の大部分は【解体発蒙】より、一部分は【医範提綱内象銅版図】

より引用され、解剖用語は【重訂解体新書】に基づいている。解剖図の流れは【重訂解体新書銅版全図】【重訂解体新書】及び【医範提綱内象銅版図】【和蘭内景医範提綱】と相似している。

- ②『解体正図』の〈正図・第4葉・心被心囊圖、縦割心見心室図〉に於いては、既成の解剖図のみならず実際の解剖所見を強く反映した描写の可能性が考えられる。
- ③『(異種) 解体正図』の真の制作者および制作時期については新たな史料が発見されない限り不明であるが、『(異種) 解体正図』と『解体正図』を詳細に比較検討することで、使用された解剖用語の相違より『(異種) 解体正図』が『解体正図』の参考元となった可能性が考えられる。
- ④天保11年(1840)12月11日に壬生藩公認の人体解剖を主催したのは齋藤玄昌と石崎正達の2名であったが、公式な解剖記録図を制作するにあたっては、壬生藩医就任および順智襲名前の二代目五十嵐順智(当時の五十嵐桂輔)もまた大きく関与していたと考えられる。
- ⑤『解体正図』のみならず『(異種) 解体正図』が共に金崎五十嵐家に伝わったことが二代目五十嵐順智の人体解剖における深い関係性をより強く示唆している。

## 付 記

本研究の要旨は第44回獨協医学会(平成28年12月4日)にて発表した。

## 謝 辞

貴重な史料を寄贈して下さった五十嵐三男様、五十嵐佐多子様ご夫妻に、この場を借りて深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) 中野正人. 壬生藩蘭学再考—解剖と種痘の視点から—. 獨協学園資料センター研究年報 2011; (3): 10-37
- 2) 柳田芳男. 医師小伝(一)「五十嵐道純・順智・桂輔・立庵」. 上都賀郡市医師会史編集委員会編. 上都賀郡市医師会史. 鹿沼市: 上都賀郡市医師会; 2006. p. 78-81

- 3) 石崎達. 壬生藩における御殿医の記録. 五街道 1990; 13(6): 3-7
- 4) 中野正人. 壬生藩蘭方医齋藤玄昌について. 壬生史考 1995; (13・14) 合併号: 77-86
- 5) 中野正人. 玄昌と解剖と広がり. 壬生町立歴史民俗資料館 中野正人編. 壬生の医療文化史. 壬生町: 壬生町立歴史民俗資料館; 2007. p. 22-29
- 6) 倉澤廣吉. 五十嵐順知君略伝. 倉澤廣吉編. 栃木県人物編. 宇都宮町: 宇都宮以文館; 1895. p. 9-10
- 7) 倉澤廣吉. 五十嵐順知君. 瓶城野史編著. 栃木県医集録. 宇都宮町: 倉澤廣吉; 1894. p. 1-3
- 8) 柳田芳男. 医師小伝(二)「五十嵐道純・貞之助」. 上都賀郡市医師会史編集委員会編. 上都賀郡市医師会史. 鹿沼市: 上都賀郡市医師会; 2006. p. 270-271
- 9) 倉澤廣吉. 五十嵐道純君. 瓶城野史編著. 栃木県医集録. 宇都宮町: 倉澤廣吉; 1894. p. 12-13
- 10) 早乙女慶寿. 西方・都賀の郷土史. 西方村, 都賀町: 西方村教育委員会, 都賀町教育委員会; 1967. p. 380-381
- 11) 酒井シヅ. 壬生藩医齋藤玄昌の業績について. 壬生町立歴史民俗資料館編. ジェンナー種痘発明二百年記念 種痘医 齋藤玄昌. 壬生町: 壬生町立歴史民俗資料館; 1996. p. 13-14
- 12) 荒川秀俊. 天保十一年壬生で実施の解體(腑分け). 下野史学 1963; (15): 20-21
- 13) 酒井シヅ. 「解体正図」について. ひくまの浜松医科大学附属図書館 1987; (13): 3
- 14) 中野正人. 県内初の西洋医齋藤玄昌とは. 酒井シヅ監修 獨協医科大学とちぎメディカルヒストリー編集委員会編. とちぎメディカルヒストリー. 壬生町: 獨協出版会; 2013. p. 98-112
- 15) 三谷樸. 解体発蒙. 文化10年(1813). 京都. 西村吉兵衛(早稲田大学図書館所蔵) [http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09\\_00862/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09_00862/index.html)
- 16) 宇田川榛齋編. 亜欧堂田善銅刻. 医範提綱内象銅版図. 文化5年(1808). (国立国会図書館所蔵) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2532459>
- 17) 宇田川榛齋訳術. 諏訪俊筆記. 和蘭内景医範提綱. 文化2年(1805). 江戸浅草茅町. 青藜閣(早稲田大学図書館所蔵) [http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09\\_00855/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09_00855/index.html)
- 18) 模写人物不明. 解体正図. 天保11年(1830)以降推定. (浜松医科大学附属図書館所蔵) [http://www.hama-med.ac.jp/lib/toshokan\\_mibu.html](http://www.hama-med.ac.jp/lib/toshokan_mibu.html)
- 19) 杉田玄白翻訳. 大槻玄沢重訂. 重訂解体新書. 寛政10年(1798)脱稿. 文政9年(1826)刊行. 江戸日本橋通. 須原屋茂兵衛(早稲田大学図書館所蔵) [http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya03/ya03\\_01061/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya03/ya03_01061/index.html)
- 20) 南小柿寧一. 中屋伊三郎. 重訂解体新書銅版全図. 文政9年(1826). 江戸日本橋通. 須原屋茂兵衛(国立国会図書館所蔵) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541182>

# A Consideration of (*Ishu*) *Kaitaiseizu* that is Another Anatomical Chart of the Historical Materials Transmitted to the Mibu Clan Doctor Igarashi

Michiyo INABA<sup>1)</sup>, Nozomu TADOKORO<sup>2,4)</sup>, Midori NISHIYAMA<sup>3)</sup>  
and Masato NAKANO<sup>1,5)</sup>

<sup>1)</sup>Research Office of the History of Medicine, Center of Education Support, Dokkyo Medical University

<sup>2)</sup>Office of Medical Education, Center of Education Support, Dokkyo Medical University

<sup>3)</sup>Center for Community Health Education, Dokkyo Medical University

<sup>4)</sup>Department of Obstetrics and Gynecology, Dokkyo Medical University

<sup>5)</sup>Mibu Town History Folk Museum

We identified the citation source of 19 anatomical diagrams of (*Ishu*) *Kaitaiseizu* donated by descendants of the Mibu clan doctor Junchi Igarashi and we identified the citation sources of the anatomical terms described in (*Ishu*) *Kaitaiseizu*. As a result, most of the anatomical diagrams of (*Ishu*) *Kaitaiseizu* were referenced to *Kaitaihatsumō*, and most of the dissection terms of (*Ishu*) *Kaitaiseizu* were based on *Jūtēkaitaishinsho*.

Furthermore, we clarified the differences and similarities between (*Ishu*) *Kaitaiseizu* and *Kaitaiseizu* by comparing (*Ishu*) *Kaitaiseizu* and *Kaitaiseizu*. *Kaitaiseizu* is a record of dissections performed in the Mibu clan in Tempō 11 (1840) and most of the anatomical diagrams and anatomical terms are cited from *Ihanteikōnaishōdōbanzu* and *Orandanaikēihanteikō*. Then we considered the creator of (*Ishu*) *Kaitaiseizu* and the production time and its role.

As a result, it was suggested that (*Ishu*) *Kaitaiseizu* was created before the dissection done in the Mibu clan and that it became a reference source for *Kaitaiseizu*, and that second-generation Junchi Igarashi was deeply involved in dissection in the Mibu clan.

**Key words:** (*Ishu*) *Kaitaiseizu*, *Kaitaiseizu*, Junchi Igarashi, Mibu clan, Dissection